

『朱子語類』訓門人訳注（二）

——卷一一五・28条～卷一一六・28条——

『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の二〇〇八年の成果である。本研究会は、『朱子語類』訓門人（巻一一三～巻一二二）の全訳を目指して、隔週で活動を続けている。（会の発足の経緯に関しては本詩第一六号参照。）

本稿の作成は、参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを共同で検討した後修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所の最後にその氏名を記した。

研究会の参加者は以下の通りである。

（垣内 景子）

清水則夫（早稲田大学文学学術院講師）・宮下和大（早稲田大学助手）・阿部光麿（早稲田大学文学学術院講師）・大場一央（早稲田大学大学院博士後期課程）・松野敏之（早稲田大学大学院博士後期課程）・中嶋諒（早稲田大学大学院博士後期課程）・小池直（早稲田大学大学院博士後期課程）・阿部亘（早

稻田大学大学院博士後期課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院修士課程)・佐々木仁美(早稲田大学大学院修士課程)・梶田祥嗣(早稲田大学大学院修士課程)・江波戸瓦(早稲田大学大学院修士課程)

凡例

※ 底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。
※ 「校注」は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

・『朝鮮古写』(徽州本朱子語類)(中文出版社) : 楠本本

・『朝鮮整版』(朱子語類)(中文出版社) : 朝鮮整版

・『朱子語類』(正中書局) : 正中書局本

・『朱子語類大全』(和刻本・中文出版社) : 和刻本

なお、次の字の異同については、一々注記しなかつた。

「著」 \leftrightarrow 「着」 「箇」 \leftrightarrow 「个」 「辨」 \leftrightarrow 「辯」 「它」 \leftrightarrow 「他」 「于」 \leftrightarrow 「於」

「邊」 \leftrightarrow 「邊」 \leftrightarrow 「辺」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※ 原文・訳文中の「」は割り注部分である。

※ 「注」で用いた略称は以下の通り。

・『語類』:『朱子語類』 なお、「注」における『語類』からの引用は、巻数と条数のみを記した。

- ・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理學叢書『二程集』）
- ・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台灣學生書局）
- ・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）
- ・『学案』：『宋元学案』（中華書局）
- ・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（李宜哲、民族文化文庫）

卷一一五 朱子十二 訓門人三

※引き続き楊道夫への訓戒。

【一 一一五 • 28】

「讀書要須耐煩、努力翻^②了巢穴。^①譬如煎藥、初煎時、須猛著火、待滚了^③、却退著、以慢火養之。讀書亦須如此。」頃之、復謂驥曰、「觀令弟却自耐煩讀書。」「驥。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一四(一五七三頁)に収める。

(校2) 朝鮮整版は「翻」を「翻」に作る。

(校3) 楠本本は「滚」を「袞」に作る。

(校4) 楠本本は記録者名を欠く。

〔訳〕

朱子「読書は辛抱づよく、努めて巣穴をひっくり返すようにとことん徹底してやらねばならない。たとえば薬を煎じるようなもので、煎じはじめは強火にし、沸騰したら今度は火を落とし、弱火でゆっくり煮詰める。読書もこのようでなくてはいけない。」

しばらくあつて、また驥わだしに言われた。

朱子「賢弟(道夫)は、辛抱づよく読書しているようだ。」

〔記録者 楊驥〕

〔注〕

(1) 翻了巢穴 未詳。口語表現の類か。巣穴をひっくり返すように、根源・根拠にまで遡つて徹底的に行う意味に解釈した。朱熹の「巣穴」の用例は、『文集』卷二六「与皇甫帥」、卷二七「与林柾之」二、『語類』卷一三一・32条に見えるが、いずれも賊や夷狄の本拠地を意味する。

(2) 譬如煎藥 同様の譬喩が卷一一四・38条に見える。

(3) 令弟 「語錄姓氏」 楊驥の項に「道夫族兄」とある。

〔^{校1}一^{校2}五・^{校3}29〕

「慤實有志而又才敏者、可⁽²⁾與爲學。」道夫曰「苟慤實有志、則剛健有力。如此、雖愚必明矣、何患不敏。」⁽³⁾曰「要之、也是恁地。但慤實有志者、於今實難得。」^(校3)「驥。」^(校2)

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を巻一一四(一五七三頁)に收める。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校3) 楠本本は記録者名を欠く。

〔訳〕

朱子「篤実で志があり、なおかつ才能に恵まれた者とこそ、ともに学ぶべきだ。」

道夫「かりにも篤実で志があるのならば、剛健で(学問の努力を続けてゆけるだけの)力がありましよう。そういう人物ならば、所謂「愚と雖も必ず明ならん」、どうして才能に欠けることが問題になりましようか。」
朱子「つまるところ、それもそうだ。ただ篤実で志のある者は、今や本当に得がたい。」

〔注〕

- (1) 本条は以下に引く卷一〇一・203条を踏まえたものと考えられる。「或説胡季隨才敏。曰、也不濟事。須是確實有志而才敏、方可。若小小聰悟、亦徒然」(記録者は学蒙)。
- (2) 可與爲學 『論語』子罕篇「可與共學。未可與適道。可與適道。未可與立。可與立。未可與權」。
- (3) 雖愚必明 『中庸』(章句二十章)「果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強」。

【二一五・30】

庚戌五月、初見先生於臨漳。⁽²⁾問「前此從誰學。」⁽³⁾寓答「自少只在鄉里從學。」先生曰「此事本無曉崎、只讀聖賢書、精心細求、當自得之。今人以爲此事如何秘密、不與人說、何用如此。」問看易。⁽⁴⁾曰「未好看、易自難看。易本因卜筮而設、推原陰陽消長之理、吉凶悔吝之道。先儒講解、失聖人意處多。待用心力去求、是費多少時光。不如且先讀論語。」⁽⁵⁾又問讀詩。曰「詩固可以興、然亦自難。先儒之說、亦多失之。某枉費許多年工夫、近來於詩易略得聖人之意。今學者不如且看大學語孟中庸四書、且就見成道理精心細求、自應有得。待讀此四書精透、然後去讀他經、却易爲力。」寓舉子宜宗兄云「人最怕拘迫、易得小成。」且言「聖賢規模

如此其大。」⁽¹⁾ 曰「未好說聖賢。但隨人資質、亦多能成就。如伯夷高潔、不害爲聖人之清、若做不徹、亦不失爲謹厚之士、難爲徇虛名。」⁽²⁾ 「以下訓寓。」

〔校注〕

（校 1） 楠本本は「答」を「荅」に作る。

（校 2） 楠本本は「曰」を「答云」に作る。

（校 3） 楠本本は「未好看易」に作る。

（校 4） 楠本本は「論語」の後に「等書」がある。

（校 5） 楠本本は「曰」を「先生答云」に作る。

〔訳〕

庚戌の年五月、臨漳にて初めて先生にお会いした。

朱子「以前は誰のもとで学ばれたか。」

徐禹「幼き頃よりただ郷里にあつて学んでまいりました。」

朱子「学問は本来何ら複雑なものではない。ただ聖賢の書物を読み、心を精密にし細かく求めていけば、かならずや自得できよう。近頃の人はこれを何らかの秘密めいたものとして考え、他人に説かない。どうしてそんなことをしようか。」

『易』を読むことについてお尋ねした。

朱子「まだ読みにくかろう。『易』は読みにくいものだ。『易』は本来占いにもとづいて設けられたものだが、陰陽消長や吉凶悔吝の道理にまで遡って探究されている。先儒の解釈は、聖人の意図をとり損ねているところが多い。心を尽くし懸命に研究すれば、どれほどの時間を費やすことか。先ずは『論語』を読んだ方がよい。」

さらに『詩』を読むことをお尋ねした。

朱子『詩』はもちろん「以て興すべし」とあるように志を奮い起こすことができる。だがやはり難しい。先儒の説も、多くは誤っている。私は幾年もの歳月を浪費して、近頃ようやく『詩』と『易』についてほぼ聖人の心を掴むことができた。今、学ぶ者は先ずは『大學』『論語』『孟子』『中庸』の四書を読んだ方がよい。そして、理解しえた道理に即して心を精密にして細かく求めていけば、おのずと得ることがあるはずだ。この四書を読み精通できてから、その後で他の經書を読めば、むしろ努力しやすいだろう。」

禹は族兄の子宜（徐誼）の「最も恐ろしいのは頑なになつて自らを責めること、それでは小さくまとまつてしまいがちだ」という言葉を挙げて申し上げた。

徐禹「聖賢の規模はあんなにも大きなのです。」

朱子「まだ聖賢を語るには及ばない。ただ各人の資質に従つてやつてゆけば、多くはそれなりに成就できるだろう。例えば伯夷の高潔さは「聖の清」たる名に恥じないものだが、かりにあそこまで徹底しなかつたとしても、謹厳篤実の士たることは失わないし、虚名に殉じることにもなりがたいだろう。」

〔以下、徐寓への訓戒。〕

〔注〕

(1) 庚戌 紹熙元年(一一九〇)。朱熹は前年の十一月に知漳州(福建省)に任せられ、この年四月二十四日に着任した。

(2) 臨漳 漳州城の西北龍溪県にある臨漳台。朱熹は漳州への赴任中この地で講学をしている。

(3) 嶲崎 「嶮崎」とも。山道が曲がりくねるよう、複雑・煩瑣で奇怪なこと。卷二二一・37条「文字不難看、只是讀者心自嶮崎了、看不出」、卷二二五・63条「聖賢言語自平正、都無許多嶮崎」。

(4) 吉凶悔吝 『易』繫辭上伝「是故、吉凶者、失得之象也。悔吝者、憂虞之象也」。

(5) 詩固可以興 『論語』陽貨篇「詩、可以興」。『集注』は「感發志意」と解す。

(6) 子宜 徐誼、字子宜、徐禹と同郷の永嘉の人。『資料索引』二〇〇七頁。『宋史』卷三九七。『学案』卷六一。

(7) 聖人之清 『孟子』万章下「孟子曰、伯夷、聖之清者也。伊尹、聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子、聖之時者也」。

(8) 徇虛名 『史記』卷八四・屈原賈生列伝「貪夫徇財兮、烈士徇名」。伯夷列伝にも引く。

問「初學精神易散、靜坐如何。」曰「此亦好、但不專在靜處做工夫、動作亦當體驗。聖賢教人、豈專在打坐上。要是隨處著力、如讀書、如待人處事、若動若靜、若語若默、皆當存此。無事時、只合靜心息念。且未說做他事、只自家心如何令把握不定。恣其散亂走作、何有於學。⁽¹⁾ 孟子謂學問之道無他、求其放心而已矣。不然、精神不收拾、則讀書無滋味、應事多齟齬、豈能求益乎。」

〔訳〕

徐寓 「初学者は精神が散漫になりやすいのですが、静坐はいかがでしようか。」

朱子 「それも良いが、静の場面ばかりで努力するのではなく、動作もまた身を以つて体験しなくてはならない。聖賢の教が、どうしてひたすら坐つていることに終始しようか。随所に力を注ぐことが大切で、読書であれ、人や物事に応対するのであれ、動静語默いいずれの場面にも同じ努力をしなければいけない。何事も無いときには、ただ心を静め意念を止めるだけのことだ。先ずはそれ以上の事はともかく、ただ自身の心がどうしてしつかりと把持できないのかを見つめるのだ。心が散乱暴走するに任せていては、学問も何もあつたものではない。孟子は「学問の道は他無し、其の放心を求むるのみ」と言つた。そうでなければ、精神は收拾がつかず、それでは書物を読んでも味わいがなく、物事に対処しても多くの支障を来たす。どうして効果を期待できようか。」

〔注〕

(1) 學問之道無他、求其放心而已矣

『孟子』告子上。

(28~31条担当 清水則夫)

【^(校1)一一五・32】

問^(校2)「有事時應事、無事時心如何。」曰「無事時只得無事、有事時也如無事時模樣。只要此心常在、所謂動亦定、靜亦定也。」問「程子言未有致知而不在敬者。」曰「心若走作不定、何緣見得道理。如理會這一件事未了、又要去理會那事、少間都成無理會。須是理會這事了、方好去理會那事、須是主一。」問「思慮難一、如何。」曰「徒然思慮、濟得甚事。某謂、若見得道理分曉、自無^(校3)閑雜思慮。人所以思慮紛擾、只緣未見道理耳。天下何思何慮、是無^(校3)閑思慮也。」問「程子常教人靜坐、如何。」曰「亦是他見人要多慮、且教人收拾此心耳。初學亦當如此。」

〔校注〕

(校1) 卷一―九・12条にも同一の文章が見える。

(校2) 楠本本は「問」を「寓問」に作る。

(校3) 朝鮮整版は「閑」を「閒」に作る。

〔訳〕

徐寓 「何か事がある時はその事柄に応じますが、何事もない時は心はどのようにしたらよいのでしょうか。」

朱子 「何もない時はただ何もないままに任せればよい、むしろ何かある時にも何もない時のように心の有り様でなければいけない。この心が常にあるべき所に在りさえすれば、（程子の）所謂「動もまた定、静もまた定」ということだ。」

徐寓 「程子は「知を致していながら、敬でない者はいない」と言われましたが。」

朱子 「心がもしぶらぶらとして定まらなければ、何によつて道理を理解することができようか。（今取組んでゐる）この事を理解しないうちに、また別の事を理解しようとすれば、そのうち何も理解できなくなつてしまふ。この事を理解してしまつて、はじめて別の事を理解することができる、つまり「主」でなければならないということだ。」

徐寓 「思慮は一つに集中させ難いものです。いかがでしようか。」

朱子 「漫然と考へてゐるだけで、何になるというのだ。私が思うに、もし道理を明らかに理解することができたならば、自然と無用の思慮もなくなるだろう。人が思慮を乱すのは、単に道理を理解していないだけなのだ。『易』の「天下何をか思、何をか慮らん」というのは、無用の思慮がないということだ。」

徐寓 「程子はよく人に静坐をさせましたが、いかがでしようか。」

朱子 「それも程子が、人があれこれ考へたがるのを見て、まずは心を収斂させようとしたにすぎない。初学者もそうすべきだね。」

〔注〕

(1) 動亦定、靜亦定

『程氏文集』卷二・答橫渠張子厚先生書「所謂定者、動亦定、靜亦定、無將迎、

無內外」。

(2) 未有致知而不在敬者

『遺書』卷三・98条「入道莫如敬、未有能致知而不在敬者」。

(3) 天下何思何慮

『易』繫辭下伝「子曰、天下何思何慮。天下歸而殊塗。一致而百慮。天下何思

何慮」。

(4) 程子常教人靜坐

卷一二・84条、同・137条以下の数条を参照。靜坐を重視したのは、二程子のうち

程顥であることが示されている。

一一五・33

先生謂寓曰「文字可汲汲看、悠悠不得。急看、方接得前面看了底。若放慢、則與前面意思不相接矣。」^(校1) 莫學某看文字、看到六十一歲、方略見得道理恁地^(校2)「賀孫錄作方略見得通透」。今老矣。看得、做甚使得。學某不濟事、公宜及早向前。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「矣」の字を欠く。

(校2) 楠本本は「賀孫錄作方略見得通透」の割注を欠く。

〔訳〕

先生が寓に仰つた。

朱子「書物は汲々として読むべきであつて、のんびりと読むものではない。急いで読んでこそ、前に読んだところとつながつていくものだ。いい加減に読んでは、前文の意味とつながらない。私の書物の読み方を学んではいけないよ。六十一歳になつて、ようやくこのように道理を理解することができた「葉賀孫の記録は「ようやく理解することがはつきりとしてきた」に作る」。今やもう年老いてしまつた。(今さら読書をして道理を)理解できたところで、何になるというのか。私を学んだとて何事も成し得ない。君は急いで前進しなさい。」

〔注〕

(1) 悠悠 朱熹は繰り返し学ぶ者の「悠悠」を戒める。卷三四・143条「爲學要剛毅果決、悠悠不濟事」、

卷一一三・33条「悠悠於學者最有病」。

【一一五・34】

〔校1〕「如古人詠歌舞蹈、到動盪血脉流通精神處、今既無之。專靠義理去研究、恐難得悅樂。不知如何。」曰〔校2〕「只是看得未熟耳。若熟看、待浹洽、則悅矣。」先生因說寓「讀書看義理、須是開豁胸次、令磊落明快、恁

地憂愁作甚底。亦不可先責效。才責效、便見有憂愁底意思、只管如此、胸中結聚一餅子不散。須是胸中寬閑始得。而今且放置閑事、不要閑思量、只專心去玩味義理、便會心精、心精、便會熟。涵養⁽³⁾當用敬、進學則在致知。無事時、且存養在這裏、提撕⁽⁴⁾警覺、不要放肆。到那講習應接、便當思量義理、用義理做將去。無事時、便著存養收拾此心。」

〔校注〕

- (校 1) 楠本本は「問」を「寓問」に作る。
- (校 2) 楠本本は「靠」を「靠着」に作る。
- (校 3) 楠本本は「曰」を「答曰」に作る。
- (校 4) 朝鮮整版は「閑」を「間」に作る。
- (校 5) 楠本本・正中書局本は「提撕」を「提撥」に作る。

〔訳〕

徐寓「古人は歌を詠い舞を踊り、所謂「血脉を動盪させ、精神を流通させる」まで（心身を）養いました。今ではそのようなこともなくなり、専ら義理によつて探求してますが、これでは（古人のような身体ごとの）悦びも得がたいのではないかと恐れます。いかがなものでしようか。」

朱子「それは理解が未熟であるからにすぎない。もし十分に理解して、深く（心に）ゆきわたせたならば、悦びも湧いてこよう。」

そこで先生は窓に言われた。

朱子「書を読み、義理を理解するときは胸中を広々とし、小事にこだわらずに明快であるようにしなければならない。そのように鬱屈していくて、何になろう。また、最初から効果ばかりを求めてはいけない。少しでも効果を期待すれば、鬱屈した気持ちが起り、ひたすらそうしていると、胸中は餅子がつかえたかのように塞がってしまう。胸中を広々とさせなければだめだ。先ずはしばらく無用のことは置いておいて、くだらない思慮をせず、心を専一にして義理を玩味してゆけば、心が緻密になる。心が緻密であれば習熟できる。（程子の所謂）『涵養には敬を用いるべきで、学を進める要は致知に在る』ということだ。何事もない時は、とりあえず（心を）ここに存養して、ぼんやりしないよう呼び覚まし、放逸にさせないことだ。議論をしたり、物事に応対したりする時になれば、義理を考え、義理によつて行わなければいけない。何もない時は、存養してこの心を收斂させなければいけないのだ。」

〔注〕

- (1) 古人詠歌舞踏（今既無之） 程頤の以下の発言を念頭においた質問であろう。『遺書』卷一七・27条「學莫大於致知、養心莫大於禮義。古人所養處多、若聲音以養其耳、舞蹈以養其血脉。今人都無、只有箇義理之養、人又不知求」。類似の記述が『遺書』卷一八・60条、同卷一一上・4条、同卷一二上・2条にも見える。

(2) 動盪血脉流通神 『史記』樂書「故音樂者、所以動盪血脉、通流精神而和正心也」。

(3) 涵養當用敬、進學則在致知 『遺書』卷一八・28条「涵養須用敬、進學則在致知」。

【一一五・35】

※本条本文と割注部分は同一場面の別記録である。同じ場面の朱熹の発言を門人たちがいかに多様に記していたかを伺わせる資料があるので、比較しやすいよう試みに上下に対照させた。網掛けの部分は、朱熹の同じ発言の記録と考えられるものが、大きく順序を違えて記録されている箇所である。

〔^{校1}〕「前夜先生所答一之動靜處、曾舉云、譬如與兩

人同事、須是相救始得。寓看來、靜却救得動、不知動如何救得靜。」

曰「人須通達萬變、心常湛然在這裏。
亦不是閉門靜坐、塊然自守。事物來、也須去應。應了、依然是靜。看事物來、應接去也不難、便是安而後能慮。」

〔^{校5}〕「淳錄云。

徐問「前夜說動靜功用相救。靜可救得動、動如何救得靜。」

曰「須是明得這理、使無不盡、直到萬理明徹之後、此心湛然純一、便能如此。如靜也不是閉門獨坐、塊然自守、事物來都不應。若事物來、亦須應。既應了、此心便又靜。心既靜、虛明洞徹、無一毫之累、便從這裏應將去、應得便徹、便不難、便是安而後能慮。事物之來、

須去處置他。這一事合當恁地做、便截然斷定、便是慮而後能得。得是靜、慮是動。如良其止、止是靜、所以止之便是動。如君止於仁、臣止於敬、仁敬是靜、所以思要止於仁敬、便是動。固是靜救動、動救靜。然其本又

動了靜、靜了動、動靜相生、循環無端。如人之噓吸、若只管噓、氣絕了、又須吸。若只管吸、氣無去處、便不相接了。

噓之所以爲吸、吸之所以爲噓。尺蠖之屈、以求伸也。
龍蛇之蟄、以存身也。

屈伸消長、闔闢往來、其機不會停息。大處有大闔闢、小處有小闔闢。大處有大消長、小處有小消長。此理萬古不易。如目有瞬時、亦豈能常瞬。定又須開、不能常開。定又須瞬、瞬了又開、開了又瞬。至織至微、無時不然。

自此心湛然純一、素無私始得。心無私、動靜便一齊當。理。心若自私、便都差了。動了又靜、靜了又動、動靜只管相生、如循環之無端。若要一於動靜、不得。如人之噓吸、若一向噓、氣必絕了、須又當吸。若一向吸、氣必滯了、須又當噓。噓之所以爲吸、吸之所以爲噓。尺蠖之屈、以求伸也。龍蛇之蟄、以存身也。精義入神、以致用也。利用安身、以崇德也。一屈一伸、一闔一闢、一消一息、一往一來、其機不會停。大處有大闔闢、大消息、小處有小闔闢、小消息、此理更萬古而不息。如目豈能不瞬時。亦豈能常瞬。又須開。開了定、定了又瞬、瞬了又定、只管恁地去。消息闔闢之機、至織至微、無物不有。」

又問、「此說相救、是就義理處說動靜。不知就應事接物處說動靜如何。」

曰「應事得力則心地靜。心地靜、應事分外得力。便是動救靜、靜救動。其本只在湛然純一、素無私心始得。無私心、動靜齊當理。才有毫之私、便都差了。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「問」を「寓問」に作る。

(校2) 朝鮮整版は「塊」を「瑰」に作る。

(校3) 和刻本は「機」を「机」に作る。

(校4) 正中書局本・朝鮮整版・楠本本は「消長」を「消息」に作る。

(校5) 楠本本は「淳錄云」を「按陳淳是一時所同間而略詳不同今附云」とする。

(校6) 楠本本は「須」の前に「亦」を入れる。

(校7) 楠本本は「是」を「便是」に作る。

(校8) 楠本本は「素無私始得心」の字を欠く。

(校9) 底本は「了」を「子」に作る。正中書局本・朝鮮整版・楠本本・和刻本に従つて改めた。

(校 10) 正中書局本は「滯」を「帶」に作る。

(校 11) 正中書局本は「護」を「護」に作る。

(校 12) 正中書局本は「伸」を「申」に作る。

(校 13) 正中書局本は「利」を「仲」に作る。

(校 14) 正中書局本・朝鮮整版・楠木本は「一闇一闢」を「一闢一闇」に作る。

[訳]

徐寓「昨晩、先生は一之（林易簡）に動と静についてお答えになつて、「例えは二人で一緒に仕事に

あたるようなものだ。お互い助け合つてはじめてうまくいく」とおっしゃいました。わたくしのみるところでは、静は動を助けることができると思うのですが、動は静をどうして助けることができるのでしょうか。

朱子「人はあらゆる変化に通達しつつ、心は常に落ちついていなくてはならない。

〔陳淳の記録。〕

徐寓「昨晩、動と静の功用が助けあうということをおっしゃいましたが、静が動を助けることができるとして、どうして動が静を助けることができるのでしょうか。」

朱子「道理を余すところなく明らかにし、あらゆる理がとことん明らかになつた後、この心が落ち着いて純一になれば、そういうふうに（動と静が相助け合う

これはまた門を閉じて静かに坐つて、じつと自ら守るというようなことではない。

物事がやつてきたら、またこれに対応しなければならない。応じてしまえば、依然として静かだ。

物事がやつてくるのをみれば、それに対応していくのも困難ではない。これこそ「安んじて後に能く慮る」ということだ。

れば、すつきりと明徹であり、わずかのわざらいもなく、この状態で対応していけば、対応を徹底することができ、困難ではない。これこそ「安んじて後に能く慮る」ということだ。物事がやつてきたら、これを処理しきてはならない。この一事についてはこうしなければならないと、きつぱりと搖るぎがない、これこそ「慮りて後に能く得る」ということだ。「得る」のは静である。「慮る」のは動である。例えば「其の止に艮まる」という場合、止まるべきところが静で、止まろうとするのが動なのだ。「君は仁に止まり、臣は敬に止まる」

という場合、仁や敬は静で、仁や敬に止まらなければならぬと思うことが動なのだ。
もちろん静は動を助

動けば静まり、静まれば動き、動は静を生じ静は動を生じ、循環して端緒というものがない。

ちょうど人が呼吸するようなものだ。もしひたすら息を吐けば、氣は絶えてしまい、また息を吸わなければならぬ。もしひたすら息を吸えば、氣はいくところがなくなってしまい、息が続かない。

息を吐くのは息を吸うため、息を吸うのは息を吐くためなのだ。(『易』に)「尺蠖の屈、以て伸びんことを求むるなり。龍蛇の蟄、以て身を存するなり」という。

屈伸・消長・開閉・往来、その働きはいまだかつて止まつたことがない。大きなところには大きな開閉

け、動は静を助けている。しかしその基本は、やはりこの心が落ち着いていて純一で、まったく無私であつてこそそつなり得るのだ。心が無私であれば、動も静もひとしく理に一致する。心にもし私があるならば、すべてが駄目になつてしまふ。動けばまた静まり、静まればまた動き、ひたすらに動は静を生じ静は動を生じ、循環に端緒がないようなものだ。もし動か静に一本化しようとしても、できないことだ。人の呼吸のように、もしずっと息を吐いてれば、氣は必ず絶えてしまい、また息を吸わなくてはならない。もしずっと息を吸つていれば、氣は必ず滞り、また息を吐かなければならぬ。息を吐くのは息を吸うため、息を吸うのは息を吐くためなのだ。(『易』に)「尺蠖の屈、以て伸びんことを求むるなり。龍蛇の蟄、以て身を存するなり。義を精しくして神に入るは、以て用を致すなり。

用を利し身を安んずるは、以て徳を崇ぶなり」という。

があるし、小さなところには小さな開閉がある。大きなところには大きな開閉があるし、大きな消長がある。小さなところには小さな消長がある、この理は大昔から変わらない。たとえば目は瞬きして閉じる時があるが、ずっと閉じたまままでいられようか。必ずまた開くはずだ。かといってずっと開いていることもできない。必ずまた閉じるはずだ。目を閉じればまた開き、開けばまた瞬きをして閉じる。どんなに微細なことについても、いつもそんなふうなのだ。」

寓 「……まで（動と静とが）互いに助け合うということについて、義理という観点から動と静について説明してくださいました。では物事に応対する場面について動静をどのように解釈すればよいのでしょうか。」

朱子 「物事に対応してうまくこなせば、心の根本は静かになる。心の根本が静かであれば、物事に対処するのも大変うまくいく。**これこそ静が動を助け、**はいまだかつて止まつたことがない。大きなところには大きな開閉があるし、大きな消長がある。小さなところには小さな開閉があるし、小さな消長がある。この理は大昔からやむことがない。たとえば目は瞬きをせずにいられようか。またずっと目を閉じていられようか。必ずまた開くはずだ。開いていれば定まり、定めればまた閉じ、閉じればまた定まる。ひたすらそうやっていくものだ。消長開閉の働きはどんな微細なことについても、あらゆる物事がもつているのだ。」

動が静を助けるということだ。ただその基本は、落ちついて純一で、まつたく私心がないことによつてこそそなり得るのだ。私心がなければ、動も静もひとしく理にある。わずかでも私があるならば、それだけですべてが駄目になる。」

〔注〕

(1) 一之 林易簡、字一之。『門人』一五〇頁。林一之が動静について問うエピソードは、卷一二〇・91条に見え、楠本本では本条の直前に配す。ただし、徐寓の挙げている質問は見えない。

(2) 譬如與兩人同事、須是相救始得。 卷四五・54条は、動静について論じて次のように述べている。「又如與兩人同事相似、這人做得不是、那人便著救他。那人做得不是、這人便著去救他。終不成兩人相推、這人做不是、却推說不干我事、是那人做得如此。那人做不是、推說不干我事、是他做得如此、便不是相爲底道理」。記録者も本条と同じく徐寓である。

(3) 安而後能慮 『大學』「知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得」。

(4) 尺蠖之屈、以求伸也。龍蛇之蟄、以存身也。 『易』繫辭下伝「尺蠖之屈、以求信也。龍蛇之蟄、以存身也。精義入神、以致用也。利用安身、以崇德也」。

(5) 慮而後能得 注(3) 参照。

(6) 良其止 『易』艮・彖伝「艮、止也。時止則止、時行則行。動靜不失其時、其道光明。艮其止（背）、

止其所也」。朱熹『周易本義』にも卦辞「艮其背」に依つて「止」を「背」に作るべしという景説の説を引く。

(7) 君止於仁、臣止於敬 『大學』「止爲人君止於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交止於信」。『周易程氏伝』卷四・艮「夫有物必有則。父止於慈、子止於孝、君止於仁、臣止於敬」。

(35条担当 阿部亘)

【一二五・36】

寓臨漳告歸、稟云「先生所以指教、待歸子細講求。」曰「那處不可用功。何待歸去用功。古人於患難尤見得著力處。今夜在此、便是用功處。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「稟云」を「取稟云」に作る。

(校2) 楠本本は末尾に「以上竝寓自録、以下見諸録。」の割注が入る。

〔訳〕

(徐) わたし 節は臨漳で暇乞いを申し上げた。

徐寓「先生のお教えは、帰つてから詳細に研究いたします。」

朱子「どこで努力できないことがあるうか。どうして帰つてから努力しようというのだ。昔の人は困難な時にこそ頑張りどころを見つけたものだ。今夜こここそが、努力のしどころだ。」

〔注〕

(1) 臨漳 福建省漳州。卷一一五・30条に庚戌(紹熙元年、一一九〇年)に初めて臨漳で会ったとある。

【一一五・37】

居甫請歸作工夫、曰「即此處便是工夫。」「可學。」

〔訳〕

居甫(徐寓)が帰つてから努力する旨を申し上げた時のこと、

朱子「今こここそが努力のしどころだ。」

〔記録者 鄭可學〕

【一一五・38】

居甫問「平日只是於大體處未正。」曰「大體、只是合衆小理會成大體。今不窮理、如何便理會大體。」「可

學。」

〔訳〕

居甫（徐禹）「平生、大体（大きいなる本体）のところが正しくありません。」

朱子「大体というのは、ただ多くの小さな道理を集めてこそ大体に成るのだ。いま理を窮めないで、どうして大体を理解することができようか。」

〔記録者 鄭可学〕

【一一五・39】

「居甫敬⁽¹⁾之是一種病、都緣是弱。仁父亦如此、定之亦如此。只看他前日信中自說臨事而懼、不知孔子自說行三軍。自家平居無事、只管恁地懼箇甚麼。」賀孫說⁽⁵⁾「定之之意、是當先生前日在朝、恐要從頭拆洗⁽⁶⁾、決裂做事、故說此。」曰「固是。若論來如今事體、合從頭拆洗、合有決裂做處、自是定著如此。只是自家不曾當這地位、自是要做不得。若只管懼了、到合說處都莫說。」「賀孫。」

〔訳〕

朱子「居甫（徐禹）も敬之（黄顙子）も同じ欠点で、すべては弱さゆえだ。仁父（徐容）もそう、定之（包定）もそうだ。たしか彼の先日の手紙には（『論語』の）「事に臨みて懼る」べきことを説いていたが、孔

子は「三軍を行う」場面について言つてゐることを理解していない。自分がふだん何事もないのに、ひたすらこのように何を懼れるというのだ。」

(葉) 賀孫 「定之の気持ちとしては、先生が先頃朝廷に出仕していらした時、必ず最初から徹底的に不正を暴き、きっぱりと物事を行われるだろうことを恐れて、それゆえそのことを申し上げたのでしょう。」

朱子 「もちろんそうだろう。昨今の事情を論じるならば、当然最初から徹底的にやるべきで、きっぱりと行うところがなければならない。それはどうしたってそうなのだ。ただ自分がその立場になければ、自ずとどうにもならない。かと言つて、もしひたすら懼れているだけであれば、言うべき場面になつても何も言えやしない。」

〔記録者 葉賀孫〕

〔注〕

(1) 敬之 黄顕子、字敬之。『門人』二六五頁。『資料索引』二九二三頁。

(2) 仁父 徐容、字仁父。徐禹の弟。『門人』一七九頁。

(3) 定之 包定、字定子。『門人』六八頁。『資料索引』五〇三頁。

(4) 臨事而懼 『論語』述而「子路曰、子行三軍、則誰與。子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也。必也臨事而懼、好謀而成者也。」

(5) 賀孫 葉賀孫、字味道。『門人』二七九頁。『資料索引』三二五〇頁。

(6) 拆洗 (着物をほどいてきれいに洗うように) 根本から徹底してやること。卷一〇八・26条「欲整頓一時之弊、譬如常浣浣、不濟事。須是善洗者、一一拆洗、乃不枉了、庶幾有益」。

一一五・40

居父如僧家禮饑⁽¹⁾、今日禮多少拜、說饑甚罪過、明日又禮多少拜、又說饑甚罪過、日日只管說。如浙中朋友、只管說某今日又如此、明日又說如此。若是見得不是、便須掀翻做教是當。若只管恁地徒說、何益。如宿這客店、不穩便、明日須進前去好處宿。若又只在這裏住、又說不好、豈不可笑。「賀孫。」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は「做教」を「却做教」に作る。

〔校2〕 楠本本は「須」の前に「便」が入る。

〔校3〕 楠本本・正中書局本・朝鮮整版本・和刻本は「又說」を「又只說」に作る。

〔訳〕

居父（徐寅）はまるで坊主の礼饑のようだ。今日も何度も拝んでは何々の罪を懺悔し、明日もまた何度も拝んではまた何々の罪を懺悔するという具合に、日々ひたすら言っているだけだ。永嘉の諸君は、ひたすら、私は今日もこうだった、明日もこうだと言うばかりだ。もし正しくないと分かつたならば、すっぱりとひっくり返して正しくすればいい。そんなふうにひたすら言っているだけで、何の益があろうか。たとえばこの宿屋に泊まり、好ましくなければ、次の日には好い宿屋に移ればいい。そこに留まつたままで、よくないと

言つてゐるだけならば、とんだお笑い種ではないか。

〔記録者 葉賀孫〕

〔注〕

(1) 禮懺 仏教で、仏に礼拝し経文を唱えては、自分の犯した罪悪を懺悔すること。

(2) 淋中朋友 朱子がその功利主義を批判した所謂永嘉学派を指す。徐寓も記録者の葉賀孫も永嘉の人。

(3) 掀翻 ひつくり返すこと。卷一二六・87条「禪學一喝一棒、都掀翻了、也是快活」。卷一二五・19

条「莊子却將許多道理掀翻說、不拘繩墨」。

(36) 40条担当 田村 有見恵)

一 一 五 · 41

洪慶將歸、先生召入與語。^(校2)出前卷子示曰「議論也平正。兩日來反覆爲看所說者、非不是。但其中言語多似不自胸中流出。原其病只是淺耳。故覺見枯燥、不甚條達。合下原頭欠少工夫。今先須養其源、始得。此去且存養、要這箇道理分明常在這裏、久自有覺。覺後、自是此物洞然通貫圓轉。」乃舉孟子求放心、操則存兩節及明道語錄中聖賢教人千言萬語、下學上達一條云「自古聖賢教人、也只就這理上用功。所謂放心者、不是走作向別處去。蓋一瞬目間便不見、纔覺得便又在面前、不是苦難收拾。公且自去提撕、便見得。」

〔校注〕

(校 1) 楠本本は、本条を巻一一六（一五九八頁）に収める。

(校 2) 楠本本は「出前卷子」を「出洪慶前所門卷子」に作る。

(校 3) 底本は「示」を「云」に作るが、楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本に従つて改めた。

(校 4) 楠本本は「反」を「及」に作る。

(校 5) 楠本本は「病」を「病痛」に作る。

(校 6) 楠本本は「欠」を「父」に作る。

(校 7) 楠本本は「明道」を「明道先生」に作る。

(校 8) 楠本本は「見得」を「見得是如此」に作る。

〔訳〕

(石) 洪慶わたしが帰ろうとすると、先生は呼び寄せお話しになられた。先日お渡しした巻子を取り出し、示して仰つた。

朱子「議論は公平で正しい。この数日、所説を繰り返し読んだが、間違つてはいない。ただその言葉の多くは、胸中から流れ出た切実なものではないようだ。その原因を考えると、それは理解の浅さに他ならない。それ故、生気がなく、あまり伸びやかではないようを感じられる。もともと大本のところで修養を欠いているのだ。今はまず根源のところを存養してこそよい。帰つたらまずは存養し、道理がはつきりとして常に我が内にあるようにしなければいけない。それを続けていけば自ずと覚るところがあるだろう。覚つた後は、自ずとすつきり理解できて、滞りも無くなるだろう。」

そして『孟子』の「放心を求む」と「操れば則ち存す」の二節と、明道先生（程顥）の語録中の「聖賢が人を教える多くの言葉は、下学して上達するものだ」の一条とを挙げて仰つた。

朱子「昔から聖賢は人に教える際、ひたすらこの道理において修養させた。所謂「放心」とは、心が勝手気ままに他所へ行ってしまっているわけではない。つまり、一瞬見失つても気づけばその時には目の前にあるのであり、苦労して心を收拾するのではない。貴公もまずは自ら意識して心を呼び覚ませば、分かるだろう。」

〔注〕

- (1) 洪慶 石洪慶、字子餘。『門人』七三頁、『資料索引』四二八頁。
- (2) 前卷子 後載の格録、ならびに楠本本に拠れば、洪慶が先に提出した質問書。
- (3) 求放心 『孟子』告子上「學問之道無他、求其放心而已矣」。
- (4) 操則存 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」。
- (5) 聖賢教人千言萬語、下學上達 『遺書』卷一・22条「聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心約之使反復入身來、自能尋向上去、下學而上達也」。「下學而上達」は『論語』憲問。

又曰「如今要下工夫、且須端莊存養、獨觀昭曠之原。不須枉費工夫、鑽紙上語。待存養得此中昭明洞達、自覺無許多窒礙。恁時方取文字來看、則自然有意味、道理自然透徹、遇事時自然迎刃而解、皆無許多病痛。

此等語^(校1)、不欲對諸人說。恐他不肯去看文字、又不實了。且教他看文字、撞來撞去、將來自有撞著處。公既年高、又做這般工夫不得。若不就此上面著緊用功、恐歲月悠悠、竟無所得。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「語」の字を欠く。

〔訳〕

朱子「いま修養しようとするならば、まずはきちんと嚴肅に存養して、「独り昭曠の原（道）を觀る」というように明るく廣々とした根源を觀なればならない。むなしく労力を費し、紙の上の言葉を探ることに終始してはいけない。心の内が明るく伸びやかになるように存養できれば、自ずと何ら滞りが無いようになると感じるのである。その時はじめて書物を手に取つて読めば、自ずと味わいがあり、道理も自然にすつきり理解でき、物事に対しても自ずと「刃を迎えて解く」が如く円滑に対応でき、何の問題も無くなる。こういう話は、誰に対しても言おうとは思わない。聞いた人があえて書物を読もうとしなくなり、学問が実を失つてしまふことを恐れるからだ。しばらくは書物を読ませ、あつちこつちぶつかりながら自分で苦労すれば、いつかは自ずと行き着くところがあるだろう。貴公は既に年齢を重ねているから、（書物を読むことから始める）こうした修養は行えない。二二（存養）のところで必死に努力しなければ、恐らく歳月はむなしく流れ、結局は何も得られないだろう。」

〔注〕

(1) 獨觀昭曠之原 『史記』卷八三・鄒陽列伝（鄒陽獄中上書）「秦信左右而殺、周用烏集而王。何則、以其能越轡拘之語、馳域外之議、獨觀於昭曠之道也。」

(2) 撞 つきあたる。行き当たる。卷一五・36条「格物窮理、有一物便有一理。窮得到後、遇事觸物、皆撞著這道理。」

又曰「近來學者如漳泉人物、於道理上發得都淺、却是作文時、文采發越粲然可觀。「謂堯卿⁽¹⁾至之。」浙間士夫又却好就道理上壁角頭著工夫、如某人輩。⁽²⁾「子善叔恭。」恐也是風聲氣習如此。」

〔校注〕

(校1) 底本は「却」を「都」に作るが、楠本本・朝鮮整版・正中書局本に従つて改めた。

(校2) 楠本本は「夫」を「人」に作る。

〔訳〕

朱子「最近の学ぶ者のうち漳州・泉州の人物などは、道理について明らかにするのはまったく浅薄だが、文章を作らせると、華麗を極め、きらびやかで目を瞠るものがある。「堯卿（李唐咨）と至之（楊至）のことを言つてゐる。」浙江の士大夫はむしろ道理について隅をつつくよう修めるなどを好む。私のところの者たちなどがそうだ。「子善（潘時粧）と叔恭（林恪）のこと。」恐らくは、やはり土地柄がそうなのであ

ろう。」

〔注〕

- (1) 堯卿至之 堯卿は李唐咨、字堯卿、漳州人。『門人』一二二二頁、『資料索引』一〇一三頁。至之は楊至、字至之、泉州人。『門人』二六九頁、『資料索引』三一〇一頁。なお石洪慶は漳州人。
- (2) 壁角 壁のすみ。卷一三・35条「看道理、須要就那箇大處看。須要前面開闊、不要就那壁角裏去」。
- (3) 子善叔恭 子善は潘時拏、字子善。『門人』三二一八頁、『資料索引』三六四三頁。叔恭は林恪、字叔恭。『門人』一五一頁。いずれも浙江人。

又云「今之學者有三樣人才。一則資質渾厚、却於道理上不甚透徹。一則儘理會得道理、又生得直是薄。一

則資質雖厚、却飄然說得道理儘多、又似承當不起。要箇恰好底、難得。此間却有一兩箇朋友理會得好。如公資質如此、何不可爲。^(校1)只爲源頭處用工較少、而今須喫緊著意做取。尹和靖在程門直是十分鈍底、被他只就一箇敬字上做工夫、終被他做得成。」因說及陳後之陳安卿二人、爲學頗得蹊徑次第。

〔校注〕

(校1) 楠本本は「可」の字を欠く。

〔訳〕

朱子「今日の学ぶ者には三様の資質がある。一つは、資質は大きくてどつしりしているが、道理についてあまりすつきりとは理解していない者。一つは、何でも道理を理解できるのだが、生来まつたくの軽薄者。もう一つは、資質は篤実であるが、飄々と道理を数多く語り過ぎ、自身担いきれないような者。ちょうど良いバランスの資質を求めて、得難いものだ。ここによく理解している学友が数人がいる。貴公のような資質であれば、どんなことでも為し得よう。ただ根源において些か修養を欠いているから、今は必死に集中して努力しなければならない。尹和靖（焞）は程子門下において非常に魯鈍であつたが、程子にひたすらに「敬」の一字において修養させられ、最後はものになつたのだ。」

そこで、陳後之（易）と陳安卿（淳）の二人が、学問を行うに際して大いにその順序を得てていることに言及された。

〔注〕

- (1) 尹和靖在程門へ終被他做得成 『外書』卷一二（祁寯所記尹和靖語）・88条「先生曰、初見伊川時、教某看敬字、某請益」。同・109条「…只是某雖愚鈍、自保守得。若思叔、則某未敢保他。伊川笑曰、也是、也是。自後每同請益退、伊川必謂諸郎曰、張秀才如此不待、尹秀才肯待」。卷一〇一・102条（記録者は甘節）は同様の記録。

- (2) 陳後之陳安卿 陳後之は陳易、字後之。『門人』二一六頁、『資料索引』二四四七頁。陳安卿は陳淳、字安卿。『門人』一二〇頁、『資料索引』二四七一頁。

又曰「顏子與聖人不爭多、便是聖人地位。但顏子是水初平、風浪初靜時。聖人則是水已平、風恬浪靜時。」

〔訳〕

朱子「顏子（顏回）は聖人（孔子）と大差は無く、聖人のレベルだ。ただ顏子は水面が穏やかになつたばかり、風や波が静まつたばかりの状態であるのに対しして、聖人は水面が常に既に穏やかで、風も波も静かな状態である。」

又曰「爲學之道、須先存得這箇道理、方可講究。若居處必恭、執事必敬、與人必忠。要如顏子、直須就視聽言動上警戒到復禮處。仲弓⁽³⁾出門如見大賓、使民如承大祭、是無時而不主敬。如今亦不須較量顏子仲弓如何會如此。只將他那事、就自家切己處便做他底工夫、然後有益。」

〔校注〕

〔校注〕 楠本本は「存」を「有」に作る。

〔訳〕

朱子「学問の道は、まずこの道理を身に存することができてこそ、議論し探究できるのだ。「居處には必ず恭、事を執りては必ず敬、人と与^(まじ)はりては必ず忠」ということだ。顏子のようであらうとするならば、直ちに視聽言動において自らを戒めて、「礼に復る（礼に立ち返る）」ようにしなければならない。仲弓（冉

雍^{（まみ）}に「門を出でては大賓に見ゆるが如くし、民を使うには大祭を承くるが如くす」と仰つたが、これは常に敬を主とするということである。いま顏子や仲弓が如何にしてこのようにできたのかを議論する必要はない。彼らの事を借りて、自らの切実なところにその修養を行えば、それでこそ有益なのだ。」

〔注〕

- (1) 居處必恭、執事必敬、與人必忠 『論語』子路「樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠」。
- (2) 視聽言動上警戒到復禮處 『論語』顏淵「顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。……非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」。
- (3) 出門如見大賓、使民如承大祭 『論語』顏淵「仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭」。

又曰「爲學之道、如人耕種一般。先須辦了一片地在這裏了、方可以上耕種。今却就別人地上鋪排許多種作底物色、這田地元不是我底。又如人作商^{（校1）}。亦須先安排許多財本、方可運動。若財本不贍、則運動未得。到論道處、如說水、只說是冷、不能以不熱字說得。如說湯、只說是熱、不能以不冷字說得。又如飲食、喫著酸底、便知是酸底、喫著鹹底、便知是鹹底、始得。」語多不能盡記、姑述其大要者如此。〔訓洪慶^{（校2）}。〕

〔校注〕

- (校1) 楠本本・和刻本は「商」を「商」に作る。
- (校2) 楠本本は「訓洪慶」を「訓餘慶自録」に作る。

〔訳〕

朱子「学問の道は、人が耕作をするのと同じようなものである。まず土地をここに整え用意できてこそ、そこではじめて耕作ができるのだ。いま仮に他人の土地の上にたくさんんの植えたい物を並べてみたところで、その田地はもとより自分のものではないのだ。また商売をするようなものもある。やはりまず多くの元手を準備してこそ、はじめて商売ができるのだ。もし元手が不十分ならば、商売はできはしない。道を論じる段になると、たとえば水を説明するのに冷たいという他なく、熱くないという言葉では説明できないし、湯を説明するのに熱いという他なく、冷たくないという言葉では説明できないようなものだ。またたとえば飲食のように、酸っぱい物を口にすれば酸っぱい物だと分かり、塩辛い物を口にすれば塩辛い物だと分かるようであつてこそよいのだ。」

お言葉は多く、全てを記録することはできないので、ひとまず要点を述べれば以上の通りである。

〔石洪慶への訓戒。〕

(41条本文担当 阿部 光麿)

〔恪錄云、⁽¹⁾ 石子餘將告歸、⁽²⁾ 先生將子餘問目出、曰「兩日反覆與公看、見得公所說非是不⁽³⁾ 是、其病痛處只⁽⁴⁾ 是淺耳。淺、故覺得枯燥、不恁條達、⁽⁵⁾ 只源頭處元不曾用工夫來。今須是整肅主⁽⁶⁾ 、存養得這箇道理分明、常在這裏。持之已久、自然有得、看文字自然通徹、遇事自然圓轉、不見費力。」乃舉孟子學問之道無它、求

其放心而已矣、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉二節、及明道語錄聖賢千言萬語、只是欲人將已放之
心約之使反復入身來、下學而上達、云「自古賢聖教人、只是就這箇道理上用功。放心、不是走作別處去。
一割眼間(校9)即便不見、才覺便又在面前、不是難收拾。公(校10)自去提撕、便見得。今要下工夫、且獨觀昭曠之原、不須枉
用工夫、鑽紙上語。存得此中昭明條暢、自覺無許多窒礙。方取文字來看、便見有味、道理通透、遇事則迎刃
而解、無許多病痛。然此等語、不欲對諸公說。且教他自用工夫、撞來撞去、自然撞著。公既年高、若不如此
下工夫、恐悠悠歲月、竟無所得。」又云「某少時爲學。十六歲便好理學、十七歲便有如今學者見識。後得謝顯
道論語、甚喜、乃熟讀。先將朱筆抹出語意好處。又熟讀得趣、覺見朱抹處太煩、再用墨抹出。又熟讀得趣、
別用青筆抹出。又熟讀得其要領、乃用黃筆抹出。至此、自見所得處甚約、只是一兩句上。却日夜就此一兩句
上用意玩味、胸中自是洒落。」

〔校注〕

- (校1) 楠本本は「恪錄云」を「按、林恪亦錄此條、前略而後異、今附云」を作る。
- (校2) 楠本本は「先生」の後に「留飯、飯罷召入與語」が入る。
- (校3) 楠本本は「問目」の前に「所」が入る。
- (校4) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本は「只」を「是」に作る。
- (校5) 楠本本は「主二」の二字を欠く。
- (校6) 楠本本・正中書局本は「已」を「以」に作る。

(校7) 楠本本は「轉」を「韓」に作る。

(校8) 楠本本は「明道」を「明道先生」に作る。

(校9) 楠本本は「反復入身來」を「反覆、入自來」に作る。

(校10) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「賢聖」を「聖賢」に作る。

(校11) 楠本本は「一割眼間即便不見」を「一割服間耶便不見」に作る。

(校12) 楠本本は「自去」の前に「後來」が入る。

(校13) 楠本本は「今」の前に「是如此」が入る。

(校14) 楠本本は「下」を「不」に作る。

(校15) 楠本本は「且」の前に「告」が入る。

(校16) 楠本本は「須」の後に「得」が入る。

(校17) 楠本本は「朱」を「米」に作る。

(校18) 楠本本は「用」を「朋」に作る。

(校19) 楠本本は「約」を「糾」に作る。

〔訳〕

〔林恪の記録。〕

石子余（洪慶）が暇乞いをした時、先生は子余の質問状を取り出して仰つた。

朱子「この数日、貴公の書状をくりかえし読んでみたところ、貴公の見解は間違つてはいないが、欠点は

ただその浅さに他ならないということが分かつた。浅いが故に生気がなく、あまり伸びやかではないようを感じられる。これはただ大本のところにおいて修養に努めてこなかつたからであろう。今は心身を整えて主一を事とし、道理がはつきりとするまで存養し、常に我が内に在るよう努めていかなければならぬ。これを久しく持続していけば自ずと得ることがあろうし、そうなれば書物を読んでも通曉し、物事に対処するのも自然に滞りが無くなつて、無駄な労力を費やすことはなくなるだろう。」

そこで『孟子』の「學問の道は它無し、其の放心を求むるのみ」と「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡ぶ、出入時無く、其の鄉を知る莫し」の二節、及び明道先生（程顥）の語録にある「聖賢が人を教える多くの言葉は、すでに放つてしまつた心を取り集めて、繰り返し自身の内に取り戻させようと願つたものであり、それは下学して上達することである」という語を探り上げて仰つた。

朱子「昔から、賢人聖人は人に教える際、ひたすらこの道理において修養させた。「放心」とは、心が勝手気ままに他所へ行つてしまつてゐることではない。ほんの一瞬見えなかつたとしても、気付きさえすればそれは目の前にあり、收拾し難いものではない。貴公も自ら意識して心を呼び覚ませば、分かるだろう。」

いま修養しようとするならば、「独り昭曠の原みなもと（道）を観る」というように明るく廣々とした根源を観なければならぬ。むなしく労力を費やし、紙の上の言葉を探ることに終始してはいけない。心の内が明るく伸びやかになるように存養できれば、自ずと何ら滞りが無いように感じるだろう。その時ははじめて書物を手に取つて読めば、自ずと味わいがあり、道理も自然にすつきり理解でき、物事に対しても自ずと「刃を迎えて解く」が如く円滑に対応でき、何の問題も無くなる。こういう話は、誰に対しても言おうとは思はない。

しばらく自分で努力させ、あつちこつちぶつかりながら苦労すれば、いつかは自ずと行き着くところがあるだろう。しかし、貴公は既に年齢を重ねてゐるから、もしこういうふうに存養のところで必死に努力しなければ、恐らく歳月はむなしく流れ、結局は何も得られないだろう。」

朱子「私は若い時から学問に取り組んできた。十六歳には理学を好むようになり、十七歳では今学ぶ者程度の見識は備えていた。その後、謝顕道（良佐）の『論語』解釈を手に入れ、とても喜んで熟読した。最初は書中の良いと思う語を朱筆で塗つていった。さらに熟読して面白く感じると、朱塗りした部分が煩瑣に感じられ、再び墨で塗つていった。また熟読してますます面白さを感じると、今度は青筆を用いて塗つた。そして更に熟読してその要領を理解すると、ついには黄筆で塗つていった。この段になると、要所というのはただ一、二句に集約されているということが分かつた。そこで日夜この一、二句だけを専心玩味すると、胸中が自ずとすつきりした。」

〔注〕

(1) 恪 林恪、字叔恭。『門人』一五一页。

(2) 謝顕道論語

謝良佐には『論語解』がある。朱熹の『論語解』に対する評価は、以下を参照。卷一九・90条「上蔡論語解、言語極多。看得透時、它只有一兩字是繁要」、卷一二〇・18条「讀書須是以自家之心體驗聖人之心。少間體驗得熟、自家之心便是聖人之心。某自二十時看道理、便要看那裏面。嘗看上蔡論語、其初將紅筆抹出、後又用青筆抹出、又用黃筆抹出、三四番後、又用墨筆抹出、是要尋那精底。看道理、須是漸漸向裏尋到精英處、方是」。

【一一五・42】

先生謂徐容父曰「爲學、須是⁽²⁾裂破藩籬、痛底做去、所謂一杖一條痕、一撻一掌血。使之歷歷落落、分明開去、莫要含糊。」「道夫。訓容父。⁽³⁾」

〔校注〕

〔校1〕本条は楠木本の「訓門人」には収められていない。

〔校2〕朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「父」の字を欠く。

〔訳〕

先生が徐容におつしやつた。

朱子「学問をするには、垣根を打破して、徹底してやらなければならない。(禅語に) 所謂「杖一打ごとに傷痕が残り、拳骨一発ごとに血痕が残る」というやつだ。一つ一つ着実に、はつきりと明らかにさせていくて、曖昧さを残さないことだ。」

〔記録者 楊道夫。徐容への訓戒。〕

〔注〕

(1) 徐容父 徐容、字仁父。『門人』一七九頁。『学案』補遺卷六九。

(2) 裂破藩籬　限界や枷を打破すること。卷三五・129条「因顯道克己詩、試於清夜深思省、剖破藩籬即大家。問、當如何去此病。曰、此有甚法。只莫驕莫吝、便是剖破藩籬也」。

(3) 一杖一條痕、一擗一掌血　禪語。徹底的に叩き上げること。「一棒一条痕」ともいう。卷一〇・24条「須是一棒一條痕、一擗一掌血。看人文字、要當如此、豈可忽略」、卷三四・140条「聖人全體極至、沒那不問不界底事。：大概聖人做事、如所謂一棒一條痕、一擗一掌血、直是恁地」。

【^校一五・43】

問學問之端緒。^{〔校〕}「且讀書依本分做去。」「以下訓節。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」を作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「答曰」を作る。

〔訳〕

学問の端緒について質問した。

朱子「まずは書物を読み、当たり前のことを当たり前にやつていくのだ。」

〔本条以下、甘節への訓戒。〕

〔注〕

(1) 依本分 奇を衒わず、そのものの本質に基づいて当たり前のことを当たり前にやつてゆくこと。卷三三・49条「庸是依本分、不爲怪異之事。堯舜孔子只是庸」、卷一三〇・26条「世上有依本分三字、只是無人肯行。且如蘇氏之學、却成箇物事。若王氏之學、都不成物事、人却偏要去學、這便是不依本分」。

(2) 節 甘節、字吉父、江西臨川人。『門人』七一页。『学案』卷六九。以下、58条まで甘接に対する訓戒が続く。

(41条注文) 43条担当 松野 敏之)

〔^{校1}一五・44〕

〔^{校2}問〕「何以驗得性中有仁義禮智信。」先生怒曰「觀公狀貌不離乎嬰孩、高談每及性命。」與衆人曰「他只管來這裏摸這性、性若是去捕捉他、則愈遠。理本實有條理。五常之體、不可得而測度、其用則爲五教、孝於親、忠於君。」又曰「必有本、如惻隱之類、知其自仁中發。事得其宜、知其自義中出。恭敬、知其自禮中出。是非非、知其自智中出。信者、實有此四者。眼前無非性、且於分明處作工夫。」又曰「體不可得而見、且於用上著工夫、則體在其中。」次夜曰「吉甫昨晚問要見性中有仁義禮智。無故不解發惻隱之類出來。有仁義禮智、故有惻隱之類。」

〔校注〕

(校1) 楠木本は本条を巻一一六(一六〇一頁)に収める。

(校2) 楠木本は「問」を「節問」に作る。

(校3) 楠木本は「教」を「官」に作る。

(校4) 楠木本は「要見性」を「欲要見得性」に作る。

〔訳〕

甘節 「どうすれば性の中に仁義礼智信があることが実感できますか。」

先生は怒つて仰つた。

朱子「君はまだ子供のような顔をして、高尚な議論をしてはいつも性命のことを持ち出す。」
門人たちにこう仰つた。

朱子「彼はひたすらここへ来て性を探し求めているが、性は捉えようとすればするほど遠ざかるものだ。
理には本来たしかに条理がある。五常(仁義礼智信)の本体ははかりしれないが、その具体的な現われとしての作用が五教であり、親に孝、君に忠なのだ。」

朱子「必ず本となるものがあるのだ。惻隱の類は、仁から発していることが分かる。物事が宜しきを得るのは、義から出ていることが分かる。恭敬は、礼から出ていることが分かる。是を是とし非を非とすることは、智から出ていることが分かる。信とは、たしかにこの四者が有ることだ。眼の前のあるるもの

は性でないものはない。まずは分かり易いところで修養することだ。」

朱子「本体は見ることはできない。まずは具体的な現われのところで修養すれば、本体はその中に在るのだ。」

次の夜、

朱子「吉甫（甘節）は昨晩、性の中に仁義礼智があることを理解したいと問うたが、何の根柢もなしに惻隱の類が出て来ることはありえない。仁義礼智があるからこそ、惻隱の類があるので。」

〔注〕

(1) 五教 一般的には、父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝(『書經』舜典)を指すが、ここで

朱熹は『孟子』滕文公上の父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信を念頭に置いているか。

【一一五・45】

問^{〔校2〕}「事有合理而有意爲之、如何。」曰^{〔校3〕}「事雖義而心則私。如路、好人行之亦是路、賊行之亦是路。合^{〔校4〕}如此

者是天理、起計較便不是。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

(校3) 楠本本は「爲之」を「爲之者」に作る。

(校4) 楠本本は「曰」を「答曰」を作る。

〔訳〕

甘節 「事柄が理に合致していたとしても、それを意識的に行なうとしたら、どうでしようか。」

朱子 「事柄は義であつてもその心は私心だ。たとえば路は、好い人が行つても路だし、賊が行つてもやはり路だ。(あれこれ考え意識するまでもなく) こうでなければならないのが天理であり、あれこれ利害を算段すれば良くない。」

〔注〕

(1) 合如此者是天理、起計較便不是 巻四二・96条 「蓋做合做底事、便純是天理。才有一毫計較之心、便是人欲」(記録者は潘時粧)。

〔一五・⁴⁶46〕

「只是揮扇底、只是不得背著他。」節問曰「只順他。」^(校2)曰「只是循理。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」を作る。

〔訳〕

朱子「扇であおぐようなもの、裏返してあおぐ」とはできないだけの「ことだ。」

甘節「扇（の作り）に順うのですね。」

朱子「理に循うだけのことだ。」

【一五一・47】

問「應事心便去了。」〔校2〕「〔校3〕心在此應事。不可謂之出在外。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「答曰」に作る。

〔訳〕

甘節「物事に対応すると、心がすぐにどこかへ行ってしまいます。」

朱子「心はここに在つて物事に対応しているのだ。外に出てしまつてはならぬ。」

【一一五・48】

問「欲求大本以總括天下萬事。」曰「江西便有這箇議論。須是窮得理多、然後有貫通處。^(校3)今理會得一分、便得一分受用、理會得二分、便得二分受用。若一以貫之、儘未在。^(校1)陸子靜要盡掃去、從^(校2)簡易。某嘗說、且如做飯、也須趁柴理會米。無道理合下便要簡易。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「答曰」に作る。

(校4) 楠本本は「有」の前に「方」が入る。

〔訳〕

甘節「大本を求めて天下万事をひと括りにしたいのですが。」

朱子「江西の人人はすぐにそういうことを言う。窮めることができた理が多くなつてこそ、貫通するところがあるのだ。今一分を理解すれば、一分得るところがあり、二分を理解すれば、二分得るところがある。「一

以て之を貫く」というようなことはむしろまだ先のことだ。陸子静（九淵）はすべてすつきりさせて簡易を求めるようとする。私がいつも言つているように、たとえば飯を炊くのにも、柴をとつてから米のことによりかかるのだ。いきなり簡易を求めるなどという道理はない。」

〔注〕

(1) 一以貫之 『論語』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。」曾子曰、「唯。」子出。門人問曰、「何謂也？」曾子曰、「夫子之道、忠恕而已矣。」衛靈公「子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與。對曰、然、非與。」曰、「非也、予一以貫之。」

(2) 簡易 『易』繫辭上「乾以易知、坤以簡能」。卷一二二・79条「江西一種學問、又自善鼓扇學者、其於聖賢精義皆不暇深考、學者樂於簡易、甘於詭弁僻、和之者亦衆、然終不可與入堯舜之道」。

【^{一五}・49】

以某觀之、做箇聖賢、千難萬難。如釋氏則今夜痛說一頓、有利根者當下便悟、只是箇無星之稱耳。^(校2)

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一六(一六〇一頁)に收める。

(校2) 楠本本は「氏」を「民」に作る。

(校3) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「稱」を「秤」に作る。

〔訳〕

私から見れば、聖賢となるのは千難万難、きわめて難しい。仏徒などはひと晩ざばつと言えば、能力のある者はすぐに悟るらしいが、これは目盛のない秤にすぎない。

〔注〕

(1) 無星之秤 星は目盛。基準のない判断のこと。卷二二六・53条「…曰、據友仁所見及佛氏之說者、此一性、在心所發爲意、在目爲見、在耳爲聞、在口爲議論、在手能持、在足運奔、所謂知性者、知此而已。曰、且據公所見而言。若如此見得、只是箇無星之稱、無寸之尺。」

〔^(校1)一一五・50〕

將與人看不得。公要討箇無聲無臭底道、雖視之不見、聽之不聞、然却開眼便看見、開口便說著。雖無極而太極、然只是眼前道理。若有箇高明底道理而聖人隱之、便是聖人大無狀。不忠不信、聖人首先犯著。

〔校注〕

(校1) 楠本本は本条を卷一一六(一六〇〇頁)に收める。

〔訳〕

(道は)人に示したとしても目に見えるものではない。君は所謂「無声無臭」の道を探求しようと求めるが、それこそ「視れども見えず、聴けども聞こえず」、しかしながら、眼を開けば見え、口を開けば言えるのだ。「無極にして太極」とはいえ、目の前の道理に他ならない。もしも高明な道理があつてそれを聖人が隠したのだとしたら、聖人は必ずいぶんひどいではないか。不忠不信を、聖人が真っ先に犯したことになる。

〔注〕

- (1) 無聲無臭 『詩』大雅・文王「上天之載、無声無臭」。『中庸』(章句三十三章)。
(2) 無極而太極 周敦頤『太極図説』

(44) 50条担当 大場一央)

【一二五・^{校1}51】

問 「節嘗見張無垢解雍徹¹一章、言夫子氣象雍容。節又見明道先生爲人亦和。節自後處事亦習寬緩。然却至
於廢事。」曰「曾子剛毅、立得牆壁在、而後可傳之子思孟子。伊川橫渠甚嚴、游楊之門倒塌了。若天資大
段高、則學明道。若不及明道、則且學伊川橫渠。」

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

甘節「節は以前、張無垢（九成）が「雍を以て徹す」の一章を解釈して、孔夫子の雰囲気はゆつたりとしていたというのを読みました。節はまた、明道先生（程顥）の人となりもやはり温和であつたのを知りました。それ以来、何か事をなすにあたつてはゆつたりと穏やかであることを心がけたのですが、するとかえつて事を避けるようになつてしましました。」

朱子「曾子は、そりたつ壁のごとくに剛毅であつたからこそ子思・孟子に学統を伝えることができたのだ。伊川（程顥）・横渠（張載）は大変に厳格であつたが、（その弟子の）游酢や楊時の門下はだめになつてしまつた。おおむね資質が高ければ明道を手本とし、もしも明道に及ばなければ、しばらくは伊川や横渠を手本とすることだ。」

〔注〕

(1) 張無垢　張九成。もと楊時に従学したが、後に禅に傾倒した。『資料索引』一二三四〇頁。『学案』卷四〇。

(2) 雍徹　三家者以雍徹。子曰、相維辟公、天子穆穆、奚取於三家之堂」。

(3) 夫子氣象雍容　ここではひとまず張九成の発言としたが、その著作中にこの語は見出せない。また張九成の『論語』についての著作としては『論語絶句』一巻が挙げられるが、そこには「雍徹」章に対する言及は見えない。

(4) 立得牆壁在　類似の表現として、卷九二・30条「畢竟他（＝曾子）落脚下手立得定、壁立萬仞」

が挙げられる。「壁立万（千）仞」は、禅語で、断崖が万仞の高さにけわしくそそり立つように、近よりがたい風格の意。

(5) 可傳之子思孟子 卷九三・21条 「只如曾子則大抵偏於剛毅、這終是有立脚處。所以其他諸子皆無傳、惟曾子獨得其傳。到子思也恁地剛毅、孟子也恁地剛毅」。

【一一五・^{校1}52】

〔校2〕「篤行允蹈、皆是作爲。畢竟道自道、人自人、不能爲。」曰、「爲一、則聖人矣。不勉而中、不思而得、從容中道。」又問、「顏子不遠復、擇乎中庸、顏子亦未到此地。」曰、「固是。只爲後人把做易了、後遂流爲異端。」

〔校注〕

- (校1) 楠本本は、本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。
- (校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。
- (校3) 楠本本は「曰」を「答曰」に作る。
- (校4) 楠本本は「又問」を「節又問」に作る。
- 〔訳〕

甘節「篤実に行動し、誠実に履行したとしても、いずれも作為であれば、結局のところ道は道、人は人であつて、道と人とは一つになりません。」

朱子「一つになれば、それは聖人だ。(『中庸』にいう)「勉めずして中り、思はずして得、從容として道に入る」だよ。」

甘節「顔子は「遠からずして復す」、「中庸を択ぶ」であったといいますが、顔子もまたこの聖人の境地には至らなかつたのですね。」

朱子「もちろんそうだ。後世の人々が道と人とを一つにすることなどたやすいとしてしまつたので、結局は異端に流れてしまうのだ。」

〔注〕

(1) 不勉而中レフ從容中道 『中庸』(章句二十章)「誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。」

(2) 不遠復 『易』復卦・初九「不遠復、無祇悔、元吉」。繫辭下伝「子曰、顔氏之子、其殆庶幾乎。」

有不善未嘗不知、知之未嘗復行也。易曰、不遠復、無祇悔、元吉。」

(3) 擇乎中庸 『中庸』(章句八章)「子曰、回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺而弗失之矣。」

〔二一五・^{校1}53〕

問^{校2}「事事當理則必不能容、能容則必不能事事當理。」曰^{校3}「容只是寬平不狹。如這箇人當殺則殺之、是理合

當殺、非是自家不容他。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一六(一六〇〇頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

(校3) 楠本本は「曰」を「答曰」に作る。

〔訳〕

甘節「何事も逐一理に合致させると、寛容であることはできません。寛容であつては、逐一理に合致させることはできません。」

朱子「寛容というのは、公平であつて偏狭でないということだ。もしもこの人は殺すべきであれば、殺す。それは理として殺すべきなのであって、自分がその人に寛容でないから殺すのではない。」

【一一五・54】

不會説教胡亂思、說慎思。^{(校2)(1)}

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一六（一六〇〇頁）に収める。

(校2) 楠本本・正中書局本・和刻本は「慎」を「謹」に作る。

〔訳〕

でたらめに思慮せよなどと言つたことはない。慎んで思慮せよと言つたのだ。

〔注〕

(1) 慎思 『中庸』(章句二十章)「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之」。

【^(校)一一五・55】

〔問〕^(校2)「節昔以觀書爲致知之方、今又見得是養心之法。」曰「較寬、不急迫。」又曰、「一舉兩得、這邊又存得心、這邊理又到。」節復問「心在文字、則非⁽¹⁾僻之心自入不得。」先生應。

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一六（一六〇〇頁）に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

〔訳〕

甘節「節は以前は、読書を「致知」の方法と考えていましたが、今ではさらに、読書は心を養う方法でも

あると分かりました」。

朱子「（読書による養心は）わりとゆつたりとしていて急迫ではない。」

朱子「（読書は）一挙両得なのだ。一方では心を存することができ、もう一方では理を理解できるのだから。」

甘節「心が書物に向かっていれば、ひねくれた心は自ずと自分の中に入つてこないのですね。」
先生は同意された。

〔注〕

（1）非僻之心 『礼記』玉藻「故君子在車、則聞鸞和之聲、行則鳴佩玉、是以非僻之心、無自入也。」

『遺書』卷一五・54条「如何一者、無他、只是整齊嚴肅、則心便一、一則自是無非僻之奸。」

【一一五・^校56】

問「觀書或曉其意、而不曉字義。如從容字、或曰橫出爲從、寬容爲容、如何。」曰「這箇見不得。莫要管他橫出、包容、只理會言意。」

〔校注〕

（校1）楠本本は、本条を卷一一六（一六〇〇頁）に収める。

(校2) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

[訳]

甘節 「読書をしていると、文意は分かっても、字義が分からぬことがあります。例えば「從容」という語について、ありのままが「從」、寛容であるのが「容」であるという説がありますが、いかがでしょうか。」

朱子 「そんなことは分かりはしない。ありのままだとか寛容だとか、そういう字義にかかづらつていなければ、文意を理解するだけのことだ。」

[注]

(1) 橫出爲從 『考文解義』に、上の「從容字」に注して「史記留侯傳索隱云、從容、閑暇也。從、任其容止不矜莊也」とあるのを踏まえて解釈した。

【一五・⁵⁷

節初到一二日、問君子義以爲質一章。曰「不思量後、只管去問人、有甚了期。向來某人自欽夫處來、錄得一冊、將來看。問他時、他說道那時陳君舉將伊川易傳在看、檢兩版又問一段、檢兩版又問一段。欽夫他又率略、只管爲他說。據某看來、自當不答。大抵問人、必說道古人之說如此、某看來是如此、未知是與不是。不然、便說道據某看來不如此、古人又如此說、是如何。不去思量、只管問人、恰如到人家見著椅子、去問

他道你安頓這椅子是如何。^{〔校6〕}

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は、本条を巻一一六（一六〇〇頁）に収める。

〔校2〕 楠本本は「伊川」を「伊川先生」に作る。

〔校3〕 楠本本は「看來」を「看得來」に作る。

〔校4〕 「見著椅子」を、楠本本は「見人家有倚子」に、正中書局本・朝鮮整版は「見有倚子」に作る。

〔校5〕 楠本本は「去問他道」を「却去問他說道」に作る。

〔校6〕 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「椅子」を「倚子」に作る。

〔訳〕

甘節が先生のところにやつて来た当初、一日二日が経つたころ、「君子は義以て質と為す」の一章について質問をした。

朱子「よく考えもしないで、ひたすら他人に質問していくのもきりがない。以前、ある人が欽夫（張栻）のもとからやってきて、（張栻の言葉を）記録したものの一冊を見せてくれた。（その詳細を）質問すると、その人がいうには、あるとき陳君拳（傅良）が伊川（程頤）の『易伝』を読んだおり、二三頁ごとに一段を、欽夫に質問したのだそうだ。欽夫という人も軽率で、ひたすら君拳の質問に答えてしまったらしい。私に言わせれば、欽夫はやはり答えないべきだったのだ。およそ他人に質問するときには、必ず「古人の説はこの

ようですが、私の考えはこのようであつて、どちらが正しくて、どちらが正しくないのか分かりません」というべきだ。そうでなければ、「私の考えはこのようではありませんが、古人はこのように説いているのは何故ですか」などというべきなのだ。よく考えもしないで、ひたすら他人に質問するのは、ちょうど他人の家にあがりこんで、椅子を見つけると、「この椅子を置いているのはどういうことか」と尋ねるようなものだ。

〔注〕

- (1) 君子義以爲質 『論語』衛靈公「子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之。君子哉」。
(2) 陳君舉 陳傳良。『資料索引』二六二八頁。陳傳良は、乾道六年(一一七〇)、三十四歳の時に太学に入り、そこで張栻と接触した。『宋史』卷四三四・陳傳良伝には、「及入太学、與廣漢張栻、東萊呂祖謙友善」とある。

〔一五・^校58〕

「精神收斂便昏、是如何。」曰「也不妨。」又曰「昏、畢竟是慢。如臨君父、淵崖、必不如此。」又曰「若倦、且瞌睡些時、無害。」問「非是讀書過當倦後如此、是纔收斂來、稍久便困。」曰「便是精神短後如此。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一六(一六〇一頁)に収める。

(校2) 楠本本は「精神」の前に「節問」が入る。

(校3) 楠本本は「問」を「節問」に作る。

〔訳〕

甘節 「精神が收斂すると、すぐさまぼんやりしてしまいます。どうしてなのでしょうか。」

朱子 「まあ、仕方のないことだ。」

朱子 「ぼんやりしてしまうというのは、結局は侮っているということだ。君主や父を前にしたり、淵や崖に臨めば、絶対にそうはなるまい。」

朱子 「もしも疲れているのなら、しばらく仮眠を取つてもかまわないよ。」

甘節 「読書をしすぎて疲れたからそうなのではありません。ほんの少し收斂すると、しばらくすればすぐに眠くなってしまうのです。」

朱子 「要するに、根気がないからそうなるのだな。」

〔注〕

(1) 精神短　巻一一七・16条「學者精神短底、看義理只到得半途、便以爲前面沒了」、巻一一〇・17条

「胡叔器患精神短。曰、若精神少、也只是做去。不成道我精神少、便不做。」

(51～58条担当　中嶋　諒)

卷一一六 朱子十三 訓門人四

【^校一一六・1】

問「平時處事、當未接時、見得道理甚分明。及做著、又便錯了。不知如何恁地。」曰「這是難事。但須是知得病通處、便去著力。若是易爲、則天下有無數聖賢了。」「以下訓義剛。」

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

義剛「ふだん何かをするとき、事に当たる前には道理がはつきりとわかつているのですが、いざそれを実行すると誤つてしまします。どうしてそのようになつてしまふのでしょうか。」

朱子「これは難しい。ただ欠点を知つたならばすぐにそれを除くよう努力するだけのことだ。もしそれが容易いのなら、天下は聖賢だらけになつてしまふ。」「本条以下、黄義剛への訓戒。」

〔注〕

(1) 義剛 黄義剛、字毅然。『門人』一二六〇頁。『資料索引』二九一五頁。『学案』卷六九。以下、10条

まで義剛に対する訓戒が続く。

【一六・2】

問「打坐也是工夫否。」曰「也有不要打坐底、如果老之屬、他最說打坐不是。」又問「而今學者去打坐後、坐得瞌睡時、心下也大故定。」曰「瞌睡時、却不好。」

〔校注〕

〔校1〕底本・正中書局本・和刻本は「果老」を「果若」に作るが、朝鮮整版に従つて改めた。

〔訳〕

義剛「打坐（座禅）も修養なのでしようか。」

朱子「まあ、打坐を不要とする人達もいる。大慧宗杲などは打坐の過ちを最も力説している。」

義剛「最近の学ぶ者は打坐をしてから、眠つてているような境地で坐つていると心も大概安定するといいますが。」

朱子「眠つてしまつては、むしろ良くない。」

〔注〕

(1) 果老 大慧宗杲(一〇八九～一一六三)、字曇晦。臨濟宗「看話禪」を唱える。『資料索引』四四

○一頁。なお、卷一二六・80条には大慧が、曹洞宗「默照禪」の了老（真歇清了）が人に座禅を勧めることを批判したことを載せる。

【一一六・3】

問「氣質昏蒙、作事多悔。有當下便悔時、有過後思量得不是方悔時、或經久所爲因事機觸得悔時。方悔之際、惘然自失、此身若無所容。有時恚恨至於成疾。不知何由可以免此。」曰「既知悔時、第二次莫恁地便了、不消得常常地放在心下。那未見能見其過而內自訟底、便是不悔底。今若信意做去後、蕩然不知悔、固不得。若既知悔、後次改便了、何必常常恁地悔。」「淳錄云「既知悔、便住了、莫更如此做。只管悔之又悔作甚。」」

〔校注〕

（校1）本条は、楠本本の「訓門人」には收められていない。

（校2）正中書局本は「何」を「可」に作る。

〔訳〕

義剛「私は愚鈍な性質で、何をするにも後悔ばかりしております。その場ですぐに後悔することもあれば、誤った後で間違いに思い至りそこでやつと後悔することもあり、あるいは大分経つてから、以前にしたことが何かの弾みで思い出されて後悔することもあります。後悔すると、茫然自失となり、身の置き処が無い気

持ちです。時には自分に腹が立つて気がおかしくなってしまうこともあります。どうすればこうしたことから免れられるのでしょうか。」

朱子「後悔したのならば、次は同じようなことをしなければよいだけのこと、いつまでも気にしていてはいけない。(『論語』に)「未だ能く其の過ちを見て内に自ら訟^せむるものを見ず」とあるが、これは後悔しない者のことだ。意にまかせて好き放題やり、後悔することを知らないのはもちろん良くない。しかし、後悔してその後改めれば済むのであって、どうしてそんなふうにいつも後悔ばかりする必要があるうか。」

【陳淳の記録「後悔したのならばそれで終わり、もうそんなことはしないだけだ。ひたすら後悔ばかりしていく何になる。」】

〔注〕

(1) 卷一一六・7条は、本条を承けたもの。

(2) 未見能見其過而内自訟 『論語』公冶長「子曰、已矣乎、吾未見能見其過而内自訟者也」。

【一
一
六
・
4】

世間只是這箇道理、譬如晝日當空、一念之間合著這道理、則皎然明白、更無纖毫窒礙。故曰天命⁽¹⁾之謂性。不只是這處有、處處皆有。只是尋時先從自家身上尋起、所以說性者道之形體也、此一句最好。蓋是天下道理尋討將去、那裏不可體驗。只是就自家身上體驗、一性之内、便是道之全體。千人萬人、一切萬物、無不是這

道理。不特自家有、它也有。不特甲有、乙也有。天下事都恁地。

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

この世はただこの道理のみ、太陽が空にあるように、ほんのわずかな思慮の動きであつてもこの道理と合致すれば、明明白白で、それ以上少しも滞りがない。それ故「天命を之れ性と謂う」なのだ。ここにあるだけなく、至るところにある。ただ探し求める時には自分自身から探し始めるので、「性とは道の形体」というのだ。この句は大変好い。つまり、天下の道理は探究していけば、どこでだって体認できるのだ。ただし自分自身において体認すれば、一個人の性の中にすでに道が完全に具わっている。千人万人、一切万物はすべてこの道理に他ならない。自分がもつてているのではなく、他人にもある。甲だけがもつてているのではなく、乙にもある。天下の事はすべてそうだ。」

〔注〕

(1) 天命之謂性 『中庸』(章句首章)。

(2) 性者道之形體 邵雍『伊川擊壤集』自序。

【二一六・五】

書有合講處、有不必講處。如主一處、定是如此了、不用講。只是便去下工夫、不要放肆、不要戲慢、整齊^一嚴肅、便是主一、便是敬。聖賢說話、多方百面、須是如此說。但是我恁地說、他箇無形無狀、去何處證驗。只去切己理會、此等事久自會得。

〔校注〕

(校1) 本条は楠木本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

書物には議論すべきところと、議論する必要のないところとがある。「主一」に関するところなどは、絶対にこうでなければならないのだから、それ以上議論する必要はない。ただ実践しようとするだけのことでの放恣になることなく、軽率になることなく、「整齊嚴肅」であること、それが「主一」であり、「敬」なのだ。聖賢の言葉は、さまざまな面に及ぶが、それぞれどうしてもそのように言わざるを得なかつたのだ。とはいへ、こちらがこのように言つても、その姿形のないものをどこで確かめればよいのか。ただ自分にとつて切実なところから取り組んでゆくだけのこと、そうすればこれらのことはいずれ自ずから理解できるだろう。

〔注〕

(1) 整齊嚴肅、便是主一、便是敬。『遺書』卷一五・177条「所謂敬者、主一之謂敬。所謂一者、無適之謂一」、同・54条「閑邪則固一矣。然主一則不消言閑邪。有以一爲難見、不可下工夫。如何一者。無他、只是整齊嚴肅。則心便一、一則自是無非僻之奸。此意但涵養久之、則天理自然明」、同・45条「惟是容貌整思慮則自然生敬、敬只是主一也。主一則既不之東、又不之西、如是則只是中。既不之此、又不之彼、如是則只是内存此則自然天理明。學者須是將敬以直內、涵養此意、直內是本」。

【一六・6】

問說漆雕開章云云、先生不應。又說與點章云云、先生又不應。久之、却云「公那江西人、只管要理會那漆雕開與曾點、而今且莫要理會。所謂道者、只是君之仁、臣之敬、父之慈、子之孝、便是。而今只去理會、言忠信、行篤敬、⁽⁵⁾博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。^(校1)須是步步理會。坐如尸、便須要常常如尸、立如齋、⁽⁷⁾⁽⁸⁾便須要常常如齋。^(校2)而今却只管去理會那流行底、不知是箇甚麼物事。又不是打破一桶水、隨科隨坎皆是」。

〔校注〕

(校1) 楠本本は「須是步步理會。坐如尸、便須要常常如尸、立如齋、便須要常常如齋」を「須是要坐如尸、立如齋」に作る。

(校2) 朝鮮整版・正中書局本は「齋」を「齊」に作る。

(校3) 楠本本は「不知是箇甚麼物事」を「是甚麼物事」に作る。

[訳]

『論語』の漆雕開の章について質問をしたが、先生はお答えにならなかつた。また「点に与せん」の章について質問したが、先生はまたお答えにならなかつた。しばらくしてこう言われた。

朱子「君たち江西の人は、やたらと漆雕開と曾点のことを話題にするが、そんなことは当面かかずらわる必要はない。いわゆる道とは、ただ君の仁、臣の敬、父の慈、子の孝に他ならない。今はただ「言は忠信、行は篤敬」、「博く学んで篤く志し、切に聞いて近く思う、仁は其の中に在り」といったところを理解しようとしなさい。一つ一つ着実に理解しなければいけない。「坐ること戸の如し」とあれば、いつも戸のようにならなければならないし、「立つこと斎の如し」とあれば、いつも斎のようにしなければならない。いま反対にあの変化して已まない天地の大きいなる働きについてひたすら理解しようとしても、それがどういうものなのか知りようがない。桶を壊して水をぶちまければ、自然に穴や溝みに隨いすべて満ちてゆく(ように、大本を一点突破すれば、個々別々の問題はすべて自然にうまくいく)というのもない。」

[注]

(1) 漆雕開章 『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子説。」

(2) 與點章 『論語』先進「點、爾何如。鼓瑟希、鏗爾、舍瑟而作。對曰、異乎三子者之撰。子曰、何傷乎。亦各言其志也。曰、莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。」

夫子喟然歎曰、吾與點也。なお『遺書』卷六・104条「漆雕開曾點已見大意、故聖人與之」とあり、『集

注』も引く。卷一一五・1条参照。

(3) 君之仁、臣之敬、父之慈、子之孝 『大學』「爲人君止於仁、爲人子止於孝、爲人臣止於敬、爲人父止於慈、與國人交止於信」。

(4) 言忠信、行篤敬 『論語』衛靈公。

(5) 博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣 『論語』子張。

(6) 坐如尸 『禮記』曲礼上「若夫、坐如尸、立如齊。禮從宜、使從俗」。

(7) 立如齋 注(6) 參照。

(8) 不是打破一桶水、隨科隨坎皆是 ここでは漆雕開や曾点に象徴される境地の問題や天地の「流行」

といった大本の真理をつかみ取れば、形而下の個々の問題は一気に片がつくという考え方に対する否定として解釈したが、「不是」を「桶水」までに掛け、「桶を壊して水をぶちまけるように大本を一点突破するのではなく、水が穴や溝に随つて満ちてゆくようにならゆることはひとつひとつ個別に理解しなければいけない」という解釈も可能か。「隨科隨坎」は『孟子』離婁上「孟子曰、原泉混混、不舍昼夜、盈科而後、進放乎四海。有本者如是、是之取爾」参照。朱熹の注は「原泉、有原之水也。混混、湧出之貌。不舍晝夜、言常出不竭也。盈、滿也。科、坎也。言其進以漸也。放、至也。言水有原本不已、而漸進以至於海、如人有實行則亦不已、而漸進以至於極也」とある。なお、「打破一桶水」は、無明や迷いを打破すれば一気に悟りの境地が開けることを喻えた禅語を連想させる表現でもある。『大慧普覺禪師書』卷二五「答富樞密」「驥聞山僧頌庭前柏樹子話、忽然打破漆桶、於一笑中千了百當」。

【一一六・7】

義剛啓曰「向時請問平生多悔之病、蒙賜教、謂第二番莫爲便了、也不必長長存在胸中。義剛固非欲悔、但作一事時、千思萬量、若思量不透處、又與朋友相度。合下做時、自謂做得圓密了。^(校1)及事纔過、又便猛省著、有欠缺處。纔如此思著、則便被氣動了志、便是三兩日精神不定。不知此病生於何處。」曰「便是難、便是難。^(校2)不能得到恰好處。顏子、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後、便是如此、便是不能得見這箇物事定帖。^(校3)這也無著力處。聖人教人、但不過是博文約禮。須是平時只管去講明、講明得熟時後、却解漸漸不做差了。」^(校4)

〔校注〕

- (校1) 楠本本は「圓」を「謹」に作る。
- (校2) 楠本本は「思」を「略」に作る。
- (校3) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。
- (校4) 楠本本は「便是難」を「又言便是難」に作る。
- (校5) 楠本本は「恰好處」を「那恰好處」に作る。
- (校6) 楠本本は「這也無著力處」を「這也個無著力處」に作る。

〔訳〕

義剛 「先日、私がふだん後悔ばかりしているという欠点についてお尋ねしたところ、次に同じ過ちを繰り返さなければよいのであって、いつまでも胸中に留める必要はない、とお教えいただきました。義剛ももとより後悔したいわけではないので、何かひとつ事をする時にも、あれこれ熟考し、考えてもすつきりしないところがあれば友人に相談したりもします。それでも、何かをした当初は、自分でもううまくやれたと思つてゐるのですが、少し時間が経つとまたすぐにまずいところがあつたと猛省してしまいます。少しでもそういうふうに考え出すと、「志」が「気」に動かされ、一二三日気持ちが落ち着かなくなつてしまします。このような欠点はどこから生じてくるのでしょうか。」

朱子 「難しい、本当に難しい。ちょうどいいバランスがとれていないのだ。顔子は「これを仰げば彌高く、これを鑽れば彌堅し、これを瞻るに、前に在れば忽焉として後に在り」と言つてゐるが、正にそういうもので、こういうことをぴつたりと固定的に見いだすことはできないのだ。それにまたこういったことには実践の手がかりもない。聖人が人に教えるのは、ただ「博文約礼（書物で博くし、礼でひきしめる）」に過ぎない。ふだんからひたすら議論をして明らかにしていかなければならないのであって、議論が熟し充分に明らかになれば、だんだんと間違ひを犯さないようになるのだ。」

〔注〕

- (1) 向時請問平生多悔之病　　卷一一六・3条参照。

- (2) 被氣動了志　　『孟子』公孫丑上「志壹則動氣、氣壹則動志也」。

(3) 仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能。既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。

(4) 博文約禮　注(3) 參照。

(5~7条担当　阿部亘)

【一一六・8】

又問^(校1)「格物工夫、至爲浩大。如義剛氣昏、也不解泛然格得。欲且將書細讀、就上面研究義理、如何。」曰^(校2)「書^(校3)上也便有面前道理在。」義剛又言「古人爲學、皆是自小得人教之有方、所以長大來易入於道。^(校4)義剛目前只是作^(校5)舉業、好書皆不會講究。而今驟收其放心、覺用力倍難。^(校6)今欲將小學等書理會、從洒掃應對進退、禮樂書數射御、從頭^(校7)再理會起、不知如何。」曰^(校8)「也只是事事致謹、常常持養、莫教放慢了、便是。若是自家有箇操柄時、便自不解到得十分走作了。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「又問」を「義剛又問」に作る。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生應云」に作る。

『論語』子罕「顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、

(校3) 楠本本は「書上也便有面前道理在」を「那書上也便有那面前道理在」に作る。

(校4) 楠本本は「義剛」を「如義剛」に作る。

(校5) 楠本本は「目前」を「日前」に作る。

(校6) 楠本本は「舉業」を「舉子業」に作る。

(校7) 楠本本は「今欲將小學等」を「今欲且將那小學等」に作る。

(校8) 朝鮮整版は「洒」を「灑」に作る。

(校9) 楠本本は「禮樂」の前に「與夫」の字が入る。

(校10) 楠本本は「起」を「起來」に作る。

(校11) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校12) 楠本本は「致謹」を「知致謹」に作る。

[訳]

義剛 「格物（物事に即してその道理を窮める）」の修養はとても広大です。 義剛わたくしのように愚鈍な人間に
はあまねく物事の道理を突きつめることなどできません。まずは書物を細かく読んでその文面の中で物事の
道理を研究してみようと思うのですが、いかがでしようか。」

朱子「紙の上にも、現実に即した道理というものがあるからね。」

義剛「昔の人が学問を修める時は、小さい頃かららしかるべき人がしかるべき方法で教えてくれましたので、
長じてからも簡単に正しい学問の道に入ることができました。 義剛わたくしは目下科举の勉強ばかりを繰り返してい

て、良い書物を入念に読むということをしてきませんでした。それ故か、失つてしまつた本心を今になつて急に取り戻そうとしても、一層骨が折れることに気づかされます。いま『小学』などの書物に取り組み、「洒掃應對進退」、「礼樂書數射御」から始めることで、学問の始めからもう一回取り組みなおそうと思うのですが、いかがでしようか。」

朱子「ひとつひとつの事に慎み深く取り組み、いつもいつも修養し、心を散漫にさせないようにすれば、それでよいのだ。自分で自分の心を制御できる時があれば、自ずと本来の良心が完全にどこかに行つてしまふというようなことにはならない。」

〔注〕

(1) 放心 『孟子』告子上「有放心、而不知求。學問之道無他、求其放心而已矣」。

(2) 洒掃應對進退、禮樂書數射御 六芸について、『周礼』地官・司徒に「以鄉三物教萬民、而賓興之。

：三曰、六藝、禮樂射御書數」、「保氏掌諫王惡。而養國子以道。乃教之六藝、一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數」とある。また『大學章句』序に「自王公以下、至於庶人之子弟、皆入小學、而教之以灑掃應對進退之節、禮樂射御書數之習」、『大學或問』に「今使幼學之士必先有以自盡乎洒掃應對進退之間、禮樂射御書數之習」、「爲小學者、不由乎此固無以涵養本原而謹夫洒掃應對進退之節與夫六藝之教」とある。

【一一六・9】

義剛^(校1)啓曰「半年得侍洒^(校2)掃、曲蒙提誨、自此得免小人之歸。但氣質昏蒙、自覺易爲流俗所遷。今此之歸、且欲閉門不出、刻意讀書、皆未知所向、欲乞指示。」先生曰「只杜門便是所向、別也無所向。只是就書上子細玩味、考究義理、便是。」義剛^(校3)之初拜先生也、具述平日之非與所以遠來之意、力求陶鑄及所以爲學之序。先生曰「人不自訟^(校4)、則沒奈何他。今公既自知其過、則講書窮理、便是爲學、也無他陶鑄處。」問「讀書以何者爲先。」曰「且將論語大學共看。」至是、又請曰「大學已看了、先生解得分明、也無甚疑。論語已看九篇。今欲看畢此書、更看孟子、如何。」曰「好。孟子也分明、甚易看。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「義剛啓曰」を欠く。

(校2) 朝鮮整版は「洒」を「灑」に作る。

(校3) 楠本本は「義剛之」を「又云」に作る。

(校4) 楠本本は「奈何他」を「奈他何」に作る。

(校5) 楠本本は「講書」を「讀書」に作る。

(校6) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

〔訳〕

義剛 「半年間身の回りのお世話をさせていただき、懇切なご指導を賜りました。お蔭様で小人になる」と

からは免れられそうです。ただ私は愚鈍な性質ですので、自分でも世俗に流されやすいことを自覚しております。このたび帰郷しましたら、しばらくは門を開ざして外出せず、読書に専念しようと思つておりますが、そこから何を目指してゆけばよいのかわかりません。どうかご指示をいただけないでしようか。」

朱子「門を開ざして読書することが目指すべきことであり、他に目指すべきことなど何もない。ひたすら書物を細かく玩味し、道理を研究すれば、それでよいのだ。」

義剛わたくが初めて先生にお会いしたときは、平生の過ちと遠路はるばるやつてきた理由とをつぶさに述べ、鍛錬していただきたいことや学問を修める際の順序を熱心にお聞きした。

朱子「人は『自ら証せむる』ことがなければどうしてやりようもない。いま君はすでに自らの過ちを知つているのだから、読書をして理を窮めることが学問なのだ。それ以外に鍛錬する方法はない。」

義剛「読書はまず何を読めばいいでしようか。」

朱子「まずは『論語』『大學』の一書を読みなさい。」

そこで、またお願いした。

義剛『大學』はすでに読み終わりました。先生の御解釈は明快で、何の疑問もございません。『論語』はもう九篇まで読みました。今これを読み終えましたら、更に『孟子』を読もうと思つてはいるのですが、いかがでしようか。」

朱子「いいね。『孟子』も明快だから、とても読みやすい。」

〔注〕

(1) 自訟

『論語』公冶長「吾未見能見其過、而內自訟者也」。

【一一六・10】

「侍教半年、仰蒙提誨。自正月間看論語、覺得略得入頭處。先生所以教人、只要逐章逐句理會、不要揀擇、敬遵明訓。^(校4)但此番歸去、恐未便得再到侍下。如語孟中設有大疑、則無可問處。今欲於此數月揀大頭段來請教、不知可否。」曰「好。」^(校5)
^(校6)

〔校注〕

(校1) 楠本本は「仰蒙提誨」を「仰蒙曲賜提誨」に作る。

(校2) 楠本本は「覺得」を「自覺得」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版は「略得」を「略知」に作る。

(校4) 楠本本は「明訓」の下に「豈敢違越」の字が入る。

(校5) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校6) 楠本本は「好」の後に「以上竝義剛自錄」の割注が入る。

〔訳〕

義剛「半年間お側で師事させていただき、ご指導を賜りました。正月頃から『論語』を読み、その入り口にはほぼたどり着けたように思います。先生のお教えは、章ごとにひとつひとつ順番に理解していくべきであつて、拾い読みしてはいけないということでした。謹んでそのお教えに従いたいと存じます。ただ今回帰郷しますと、おそらく再びはお側で師事させていただくことはできないかと存じます。『論語』『孟子』を読んでもし大きな疑問が生じたとしても、お尋ねのしようもございません。そこでこの数ヶ月間で重要な箇所を選んでお教え願いたいと思いますが、よろしいでしょうか。」

朱子「いいだろう。」

(8~10条担当 江波戸瓦)

【校¹】
一一六・11

先生問^{〔校²〕}晏淵。「平日如何做工夫。看甚文字。」曰「舊治春秋竝史書。」曰「春秋如何看。」曰「只用劉氏^{〔校³〕}說看。」曰「公數千里來見某、其志欲如何。」曰「既拜先生、只從先生之教。」曰「春秋是學者末後事。惟是理明義精、方見得。春秋是言天下之事。今不去理會身^{〔校⁴〕}上事、却去理會天下之事、到理會得天下事、於身已上却不會處置得。所以學者讀書、先要理會自己本分上事。」又言^{〔校³〕}「劉德修向時章疏中說道學字、用錯了。」先生因論「德修向時之事、不合將許多條法與壽^{〔校⁴〕}皇看、暴露了。被小人知之、却做了脚手。某以爲、大率若小人勢弱時節、只用那虛聲、便可恐得他去。若小人勢盛時節、便不可如此暴露、被他先做脚手。雖然、德修亦自

好。當時朝廷大故震動。」「訓淵。」

〔校注〕

- (校1) 本条は、楠本の「訓門人」には収められていない。
- (校2) 朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「竝」を「并」に作る。
- (校3) 底本は「徳」を「道」に作る。朝鮮整版・正中書局本・和刻本に従い改めた。
- (校4) 正中書局本・和刻本は「修」を「脩」に作る。

〔訳〕

先生は**晏淵**わだいに訊ねた。

朱子「ふだんはどういった修養をしてきたのかね。どんな書物を読んでいるのかね。」「これまで『春秋』と史書を学んでおりました。」

朱子「『春秋』はどのように読んだのかね。」

晏淵「ひたすら劉氏の説に拠つて読みました。」

朱子「君ははるばる遠方より私に会いに来て、どんな志をもつているのだね。」

晏淵「先生に礼をとりました以上は、ただ先生のお教えに従うばかりです。」

朱子『春秋』は学ぶ者にとって最後に修めるべきものだ。理義が明瞭で精密になればこそ、はじめて理解できる。『春秋』は天下のことを論じている。いま自分自身のことを分かろうともしないで、逆に天下の

ことを理解しようとするならば、たとえ天下のことが理解できたとしても、自身のことには対処できない。だから学ぶ者が読書するには、まず自身の本分のこと取り組む必要があるのだ。」

さらに仰った。

朱子「劉徳修（光祖）は以前、上奏文の中で「道学」という言葉について論じたが、間違っていた。これに因んで仰った。」

朱子「徳修の先日の件は、多くの条法を寿皇（孝宗）の御覽に入れて表沙汰にするべきではなかつたのだ。結局小人たちに知られてしまい、先に手を打たれてしまつた。私が思うに、おおむね小人の勢力が弱い時ならば、空脅しでも彼らを威嚇できる。小人の勢力が盛んな時には、このように表沙汰にして、彼らに先に手を打たれるのはよろしくない。とはいへ、徳修も大したものだ。当時、朝廷は大いに震撼したではないか。」

〔晏淵への訓戒。〕

〔注〕

(1) 晏淵　字亞夫、号蓮塘。『門人』二六六頁。『資料索引』三二〇五頁。『学案』卷六九。以下、14条まで晏淵への訓戒。

(2) 劉氏　本条後段で言及される劉光祖（字徳修、号後溪）は「与晏亞夫」（『文集』卷六三）にも言及がある。『資料索引』三九四三頁、『宋史』卷三九七、『学案』卷七九。決しかねるが、次の二人も考えられる。劉敞（一〇一九一一〇六八。字原父、号公是）は卷八三・38条に「如劉原父春秋亦好」と言及がある。劉絢（一〇四五一一〇八七。字質夫）も『春秋』に通じ、程顥に称賛されている（『宋史』

卷四二八）。卷一二九・44条に「又問、曾看劉質夫春秋、謝顯道胡明仲集否」とある。

(3) 劉德修向時章疏中 『西山文集』卷四三「劉閣學墓誌銘」に「大學之教、明德爲先、其間舉詩人之言、於是有所道學之目。曰如切如磋、道學也。如琢如磨、自修也。然則臣所謂以居仁由義爲道、正心誠意爲學者、又在於切磋而琢磨之」とある。『學案』卷七九には「論道學疏」として収める。

(4) 壽皇 寿皇聖帝。孝宗（趙眘。一一六二—一八九在位）。

【^校一六・12】

晏亞夫將上趙子直黃文叔^{〔2〕}二書呈先生。先生曰「公有志於當世、亦自好。但若要從自家身上做將來、須是捨其所已學、從其所未學。」「恪。」

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

晏亞夫は、趙子直（汝愚）と黃文叔（裳）への書簡二通を先生にお見せした。

朱子「君が当世に志をもつのは、結構なことだ。ただ、自分自身のことからやつていこうとするのならば、これまでに学んだものにこだわらず、むしろまだ学んでいないことの方に目を向けるべきだ。」

〔記録者 林恪〕

〔注〕

(1) 趙子直 趙汝愚(一一四〇一一九六)、字子直。『資料索引』三四四九頁、『宋史』卷三九二、『学案』卷四六。

(2) 黃文叔 黃裳(一一四六一一九四)、字文叔、号兼山。『資料索引』二八六七頁、『宋史』卷三九三、『学案』卷七二。なお卷一三二・⁸⁰条では、趙子直と黃文叔を並記して称賛している。

(3) 恪 林恪、字叔恭。『門人』一五一頁。

〔校¹一六・13〕

先生語晏亞夫云「亞夫歸去、且須杜門安坐數年、虛心玩味他義理、教專與自家心契合。若恁^{校²底}時、病痛自去、義理自明。大抵靜、方可看義理。」〔佐³。〕

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には收められていない。

(校2) 朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「底」を「地」に作る。

〔訳〕

先生は畠亞夫に仰った。

朱子「亞夫は帰つたら、まず数年間は門を閉ざして静かに座し、虚心に義理を玩味し、自身の心と一致させるようにしなさい。そうなれば患いは無くなり、義理は自ずと明瞭になる。おおむね静であつてこそ、義理が分かるのだ。」「記録者 蕪佐」

〔注〕

(1) 佐 蕴佐、字定夫。『門人』三五一頁、『資料索引』四〇三一頁、『学案』卷七一。

〔校注〕
一六・14

「須是靜、方可爲學。」謂亞夫曰「公既歸、可且杜門潛心數年。」^{〔1〕}「方子。^{〔2〕}蓋卿錄云、亞夫稟辭、先生勉之曰「歸後且杜門潛心二三年、仍須虛心以讀書。」」

〔校注〕

(校1) 本条は、楠本本の「訓門人」には收められていない。

(校2) 正中書局本は「須虛心」を「虛須心」に作る。

〔訳〕

朱子「静であつてこそ、学問を修めることができる。」

先生は（襄）亜夫に仰つた。

朱子「君は帰つたら、まず数年間は門を閉ざして心を静めるのがよろしかろう。」

〔記録者 李方子〕

「襄蓋卿の記録。亜夫が別れの挨拶をした際、先生は彼を励まして仰つた。「帰つたらまづ一、三年は門を開ざして心を静めよ。これからも変わらず虚心に読書をしなさい。」」

〔注〕

(1) 方子 李方子、字公晦、号果齋。『門人』一一三頁、『資料索引』九四七頁、『宋史』卷四三〇、『学案』卷六九。

(2) 蓋卿 襄蓋卿、字夢錫。『門人』三六四頁、『資料索引』四四九七頁、『学案』卷六九。

【一一六・15】

甲寅八月三日、蓋卿以書見先生於長沙郡齋、〔校1〕〔校2〕請隨諸生遇晚聽講。是晚請教者七十餘人。〔校3〕〔校4〕或問「向蒙見教、讀書須要涵泳、須要浹洽。因看孟子千言萬語、只是論心。七篇之書如此看、是涵泳工夫否。」曰「某爲見此中人讀書大段鹵莽、所以說讀書須當涵泳、只要子細尋繹、令胸中有所得爾。如吾友所說、又襯貼一件意思、硬要差排。看書豈是如此。」又一士友曰「先生涵泳之說、乃杜元凱優而柔之之意。」曰「固是如此、亦不用如此解說。所謂涵泳者、只是子細讀書之異名也。大率與人說話便是難。〔校5〕〔校6〕某只說一箇涵泳、一人硬來差排、一

人硬來解說。此是隨語生解、支離延蔓、〔校1〕閑說閑講、少間展轉。只是添得多、說得遠。〔校2〕如此講書、如此聽人說話、全不是自做工夫、全無巴鼻。可知是使人說學是空談。此中人所問、大率如此。好理會處不理會、不當理會處却支離去說、說得全無意思。」〔校3〕「以下訓蓋卿。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「請」の後に「曰蓋卿願從學久矣。乃今得遂所圖。然先生以召命戒途、有日殊爲匆匆。即欲」が入る。

(校2) 正中書局本は「諸」を「請」に作る。

(校3) 楠本本は「講」の後に「先生曰、甚好甚好」が入る。

(校4) 楠本本は「或問」を「或問先生云」に作る。

(校5) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

(校6) 楠本本は「又一士友」を「又有士友」に作る。

(校7) 楠本本は「與人說」を「與今人說」に作る。

(校8) 楠本本は「難」を「難處」に作る。

(校9) 楠本本は「只」を「只是」に作る。

(校10) 楠本本は「排」を「別」に作る。

(校11) 朝鮮整版は「閑說閑講」を「間說間講」に作る。

(校 12) 楠本本は「遠」の後に「却要做甚若是」が入る。

(校 13) 楠本本・正中書局本は「講書」を「読書」に作る。

(校 14) 楠本本は「以下訓蓋卿」を「以上蓋卿自錄」に作る。

〔訳〕

甲寅（一一九四年）八月三日、蓋卿わたしは書状によつて長沙の郡齋で先生にお目にかかり、諸生に隨行して夜の講義を拝聴することを願い出た。その晩、教えを請うた者は七十人余りであつた。

ある人「先日、書物を読むには「涵泳（ひたるようじつくりと味わう）」しなければならない、自分自身にぴつたりとゆきわたせるようでなければならぬとお教えいただきました。そこで『孟子』の千言万語を読みましたところ、ひたすら心を論じておりました。『孟子』全七篇をこのように読むのが「涵泳」の修養ということなのでしょうか。」

朱子「私はここにいる諸君の読書が概していい加減であるのを見たからこそ、読書は「涵泳」して、子細に探究し胸中に得心するようでなければならないと言つたのだ。君の言つているようなことは、自分の考えを貼り付けて、無理矢理こじつけようとするものだ。書物の読み方というものが、どうしてそのようなものであろうか。」

別の士友「先生の「涵泳」の説は、杜元凱（預）のいう「優にして之を柔らぐ」の意味でしようか。」

朱子「もちろんそうだが、そんなふうに説明する必要はない。私のいう「涵泳」とは、子細に書物を読むことの別名に過ぎない。だいたい人に話をするのは難しいものだ。私はただ「涵泳」と言つただけなのに、

ある人は無理矢理こじつけようとするし、ある人は強引に説明しようとする。これは言葉が勝手に解釈を生み出し、脈絡無く広がり、どうでもいい議論を繰り返すうちに、そのうちとんでもない方へ行つてしまつたのだ。余計なことを付け加えては、的外れなことを言うばかり、こんなふうに書物を議論し、こんなふうに人の説明を聞いても、何にもなりはしない。むしろ人に学問は空談にすぎないと語らせてしまつてのことを見らねばならない。ここにいる君たちの質問は、概ねこのようなものだ。取り組み易いことに取り組まず、取り組むべきでないことについて支離滅裂に語るが、言つてはいることはまったく意味をなさない。」

〔本条以下、襲蓋卿への訓戒。〕

〔注〕

(1) 甲寅 淳熙五年(一一九四)、朱子六五歳。襲蓋卿ら、同年、朱子が潭州知事として長沙に滞在した間の門弟については、田中謙二「朱門弟子師事年攷」に論攷がある。

(2) 或問 この語から本条末尾までは卷一二一・34条にも、ほぼ同文の記録がある。

(3) 杜元凱優而柔之 杜預(字元凱)『春秋經伝集解』卷一に「優而柔之、使自求之」とある。もと『大戴礼記』子張問入官の語。

(11条～15条担当 阿部 光麿)

蓋卿因言「致知格物工夫既到、然後應事接物、始得其宜。若工夫未到、雖於應事接物之際、未盡合宜、亦只得隨時爲應事接物之計也。」〔校2〕曰「固是如此。若學力未到時、不成不去應事接物。且如某在長沙時、處之固有一箇道理。今在路途、道理又別。人若學力未到、其於應事接物之間、且隨吾學力所至而處之。善乎明道之言曰、學者全體此心。學雖未盡、若事物之來、不可不應。但隨分限應之、雖不中不遠矣。」〔校5〕

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は「亦只得」を「亦得」に作る。

〔校2〕 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。

〔校3〕 楠本本は「物」の後に「得」が入る。

〔校4〕 楠本本は「而」の一字を欠く。

〔校5〕 楠本本は末尾に「以下訓蓋卿」の割注が入る。

〔訳〕

(譯) 蓋卿「致知・格物の修養が十分となつてその後で物事に接するならば、適切な応接対処ができます。もし修養が十分でないとしても、たとえ全てはうまく物事に対応することが出来なくとも、その都度、物事に対応していかなくてはならないということでしょうか。」

朱子「もちろんそうだ。学問の力が不十分であるからといって、まさか物事に応対しないというわけにもいくまい。たとえば長沙に居る時には、そこに居るなりの道理があつたが、今のように旅の途中にあつては、

道理はまた別だということだ。人はもし学ぶこと不十分であつたとしても、物事に応接対処する場においては、とりあえずは自分が学んで身につけた力に応じて対処していかなくてはならない。明道（程顥）の言葉はなかなか良い。「学ぶ者はこの心をまる」と發揮せよ。学問が不十分であつたとしても、物事が到來したならば、対応していかなくてはならない。その場合はただ自分の力量に応じて対応する、そうすれば中らずといえども遠からずの対応ができる」というものだ。」

〔注〕

（1）明道之言曰「雖不中不遠矣

『遺書』卷二上・13条。

【一六・17】

蓋卿稟辭、且乞贈言。先生曰「逐日所相與言者、^{（校1）}宜著工夫、不用重說。^{（校2）}」曰「尚得爲遠謁函丈之計。^{（校3）}」
「人事不可預期。歸日、宜一面著實做工夫。^{（校4）}」

〔校注〕

（校1）楠本本は「宜」の前に「皆所」が入る。

（校2）楠本本は「曰」を「蓋卿又請曰」に作る。

（校3）楠本本は「尚」の前に「此來幸甚待博約之誨所得洪多然於承教之願猶未深憊來歲儻」が入り、「尚」

の後に「未死繼」が入る。

(校4) 楠本本は末尾に「蓋卿猶在先人服中」の割注が入る。

〔訳〕

(襲)^{わだじ} 蓋卿は暇乞いをし、何かお言葉を頂きたくお願い申し上げた。

朱子 「日々、共に議論してきたことについて、努力すればよろしい。繰り返し言う必要はない。」

蓋卿 「いつの日かまた、先生に拝謁したいと願つております。」

朱子 「人の世のことは予め期すべからず。帰つたら、ひたすら着実に修養に努めなさい。」

〔注〕

(1) 函丈 年長者あるいは先生に対する敬称。

【一一六・18】

初見、先生云「某自到此、與朋友亦無可說、^{〔1〕}古人學問只是爲己而已。聖賢教人、具有倫理。學問是人合理會底事。學者須是切己、方有所得。^{〔2〕}今人知爲學者、聽人說一席好話、亦解開悟。到切己工夫、却全不曾做、所以悠悠歲月、無可理會。若使切己下工、聖賢言語雖散在諸書、自有箇通貫道理。須實有見處、自然休歇不得。如人趁養家一般、一日不去趁、便受飢餓。今人事無小大、皆潦草過了。只如讀書一事、頭邊看得兩段、便揭過後面、或看得一二段、或看得三五行、殊不曾子細理會、如何會有益。」或問「人講學不明、用處全差

了。」曰「不待酬酢應變時。若學不切己、自家一箇渾身自無處著、雖三魂七魄、亦不知下落、何待用時方差。」坐間有言及傅子困者。^(校4)曰「人雖見得他偏、見得他不是、此邊却未有肯著力做自家工夫、如何不爲他所謾。近世人大被人謾、可笑。見人胡亂一言一動、便被降下了。只緣自無工夫、所以如此。便又有不讀書之說、可以誘人。宜乎陷溺者多。」先生又云「彼一般說話、雖是說禪、却能鞭逼得人緊。後生於此邊既無所得、一溺其說、便把做件事做、如何可回。終竟他底不是、愈傳愈壞了人。」或又云「近世學者多蹣等。」亦曰「更有不及等人。」「以下訓⁽⁴⁾謙。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「今人」を「今世有人」に作る。

(校2) 楠本本・正中書局本は「潦草」を「老草」に作る。

(校3) 楠本本は「殊」の前に「或都不看」が入る。

(校4) 楠本本は「曰」を「先生云」に作る。

(校5) 楠本本は「亦曰」を「先生云亦」に作る。朝鮮整版・正中書局本は「亦曰」を「曰亦」に作る。

〔訳〕

初めて先生にお目見えした時のこと。

朱子「私はここに至つてもう君たちに言うべきことは何もない。古人の学問はただただ自分のためであつた。聖賢の教えには整つた条理が備わつてゐるのであり、学問とは人が取り組むべきことなのだ。学ぶ者は

自身に切実に努めてこそ、得るものがある。今の学問のことを知る人たちは、他人のちょっとといい話を聞いても悟ることができるというが、自身に切実な修養となると全くやろうとせず、歳月をとりとめもなく過ごしてしまつて結局何にも理解できない。もし自身に切実なことに努めるならば、聖賢の言葉は諸書の中に散在しているといつても、自ずとそこに貫通する道理が見えてくるだろう。本当に理解することがあれば、自然と修養を怠ることはできなくなるものだ。たとえば人が稼いで家族を養うようなもので、一日でも稼ぎに行かなければ、家族は飢えてしまう。今の人たちは事の大小に拘らず、すべていい加減にやりすごしてしまつてある。読書の一ことにしても、はじめの方で数節くらい読めば、そのまま適当にページをめくつていって、時折、数節ないし数行を読むだけで、仔細に理解しようとはしない。これでどうして（読書によつて）何か得るものがあるだろうか。」

ある人「学問的議論が明らかでなければ、その実践においても全て過つことになるのではないでしょうか。」

朱子「実際の対応の時を待つまでもない。学問が切実なものでなければ、我が身ひとつまるごと落ち着きどころがなくなつてしまつて、魂さえ收まり処が分からぬ。過つというのであれば、実践の場面を待つまでもなかろう。」

一座の間で傳子困（夢泉）に言及する者がいた。

朱子「人は彼の偏りや過ちをに気づいてはいるようだが、ではここで自身の修養に積極的に努めている者はいるだろうか。それでどうして彼に騙されないだろうか。近頃の人が大いに騙されているのは、まったくお笑い種だ。人のいいかげんな一言一動を見てはすぐに影響されて堕落してしまうのは、それは君たち自身

に積み重ねてきた修養がないからそうなつてしまふのだ。書物を読まなくともいいなどと言ひ出して人々を魅了する。それに陥つてしまふ者が多いのももつともなことだ。」

朱子「彼のある種の議論は禪のようなことを説いているとはいへ、人の気持ちを驅り立てひきしめるところがある。若い人たちがこちら（の正しい学問）で得るところがなく一たび彼の説に溺れてしまうと、それをそれなりのことと見なしてしまふ。そうなればどうしてこちらに引き戻せようか。こうして彼の間違いは、伝われば伝わるほど人をダメにしていくのだ。」

ある人「近頃の学ぶ者は、段階を飛び越えようとすることが多いということでしょうか。」

朱子「段階にすら達していない人もいるがね。」

〔本条以下、廖謙への訓戒。〕

〔注〕

(1) 古人學問只是爲己而已

『論語』憲問「子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。」

(2) 三魂七魄
道教や民間では、天魂（死後、天に向かう）、地魂（死後、地に向かう）、人魂（死後、墓場に残る）を「三魂」、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲を「七魄」と言う。「三魂七魄」はいわゆる魂魄のこと。

(3) 傅子困 傅夢泉、字子困（困は、淵の古字）。陸九淵の高弟。『資料索引』二九九七頁。『学案』卷

七。卷一二四・47条参照。

(4) 謙 廖謙、字益仲、衡陽人。『門人』二八七頁。『資料索引』三三〇二頁。『学案』補遺卷六九。

【一一六・19】

問謙「曾與戴肖望相處、如何。」曰「亦只商量得舉子程文。」曰「此是一厄。人過了此一厄、當理會學問。今人過了此一厄、又去理會應用之文、作古文、作詩篇、亦是一厄。須是打得破、方得。」

〔校注〕

(校1) 本条は楠本本の「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

朱子「以前、戴肖望（渙）といった時はどうだったかね。」

廖謙「ただ科挙の受験用の文章について相談しただけでした。」

朱子「これは一つの厄介事だ。人はこの厄介事を乗り越えて、学問に取り組まなければならぬのだ。ところが今のはこの厄介事が終わつても、更に実用の文章に取り組んだり、古文や詩篇を作つたりする。これもまた別の厄介事だ。こういうものを打ち破つてこそよいのだ。」

〔注〕

(1) 戴肖望 戴渙(？—一二五)、字肖望、一作少望。永嘉人。『資料索引』四二二〇頁。『宋史』卷

四三四。『學案』卷五三。卷一二三・26條「戴肖望比見其湖南說話、却平正。只爲說得太容易了、兼未免有意於弄文」。

【一一六・20】

〔校1〕「爲學工夫、以何爲先。」曰「亦不過如前所說、專在人自立志。既知這道理、辦得堅固心、一味向前、何患不進。只患立志不堅、只恁聽人言語、看人文字、終是無得於己。」或云「須是做工夫、方覺言語有益。」^{〔校2〕}曰「別人言語、亦當子細窮究。^{〔校3〕}孟子說我知言。我善養吾浩然之氣。知言便是窮究別人言語。他自邪說、何與我事。被他謾過、理會不得、便有陷溺。所謂生於其心、害於其政。作於其政、害於其事。蓋謂此也。」

〔校注〕

〔校1〕楠本本は「問」を「謙問」に作る。

〔校2〕楠本本は「曰」を「先生云」に作る。

〔校3〕楠本本は「究」を「理」に作る。

〔訳〕

廖謙 「學問修養は何を先としたらよいですか。」

朱子 「やはり以前に言つたことに尽きる。(學問修養の第一歩は) 専ら自ら志を立てるにある。道理

を知つたからには、心を堅固にし、ひたすら前へ向かうのみ、どうして進めるかどうか心配する必要があるうか。ただ志の立て方が堅固でないことだけを心配すればよいのだ。（志をしつかりと立てずに）そんなふうにただ人の言葉を聴き、人の書いたものを読んでいても、結局何ら己に得るものはない。」

ある人「実践してはじめて言葉に得るところがあることに気づくのですね。」

朱子「他人の文章もやはり子細に研究しなければいけない。孟子は「我、言を知る。我、善く吾が浩然の氣を養う」と言つた。「言を知る」とは、他人の文章を研究することだ。人が邪説を吐いたところで、どうして自分に関わろうか。人に欺かれてしまつて理解できなければ、邪説に陥り溺れてしまうことなる。「その心に生ずれば、その政を害す。その政に作れば、その事を害す」というのはつまりのことなのだ。」

〔注〕

(1) 孟子説我知言～浩然之氣 『孟子』公孫丑上。

(2) 生於其心～害於其事 注(1)に同じ。「何謂知言。曰、諺辭知其所蔽。淫辭知其所陷。邪辭知其所離。遁辭知其所窮。生於其心、害於其政。發於其政、害於其事。聖人復起、必從吾言矣。」。

【一一六・21】

德徳之看文字尖新尖新、如見得一路光明、便射從此一路去。然爲學讀書、寧詳母略、寧近母遠、寧下母高、寧拙母巧。若一向罩過罩過、不加子細、便看書也不分曉。然人資質亦不同、有愛趨高者、亦有好務詳者。雖皆有得、

然詳者終是看得博博浹洽。又言「大學等書、向來人只說某說得詳、如何不略說、使人自致思。此事大不然。人之爲學、只是爭箇肯不肯耳。他若無得、不肯向這邊、略亦不解致思。他若肯向此一邊、自然有味、愈詳愈有意味。^{〔後〕}」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は「徳之」の文字を欠く。

〔校2〕 楠本本は末尾に「以上皆謙自録、下見諸録」の割注が入る。

〔訳〕

朱子「徳之（廖謙）」の書物の読み方はするどく斬新で、一つ閃きがあると、そこから一気に追究する。しかし、学問としての読書は、粗略であるよりはむしろ詳細に、高遠であるよりはむしろ卑近に、巧みであるよりはむしろ拙いくらいが良いのだ。もしひたすら大まかに読んで子細な検討を加えなければ、書物を読んでも何も分からぬ。とはいへ、人の資質も同じではないから、高遠に趨りやすい者もいれば、詳細に務めることを好む者もいる。いずれもそれ得るものはあるだろうが、詳しく読む者が結局は広くしつかりと読むことができるのだ。」

朱子「『大學』等の書に関して、これまで人は、私が詳しく解説しすぎる、どうしてもつと大まかに説明して自分で考えるようにさせないのかとばかり非難してきた。これは大いに間違っている。人が学問をするには、ただやる気があるか否かだけが問題なのだ。しかし、人にもし取つかかりとなる理解がなければ、こ

ちらへ向かおうという気にはならず、（自分で考えさせようとして）大まかに説明しても、自ら考ることなど出来はしない。その人が（私の説明を手がかりに）もしこちらへ向かう気になつたとしたら、自ずと味わいを得ることができるのであって、そうなれば詳しければ詳しいほど、味わいが増すのだ。」

〔注〕

- (1) 讀書、寧詳母略、寧近母遠、寧下母高、寧拙母巧 同様の表現が卷一〇・33条にも見える。
- (2) 罩 外側から覆うこと。卷一一七・43条「大抵看道理、要得寛平廣博、平心去理會。：不要將一箇大底言語都來罩了、其間自有輕重、不去照管。」

【一一六・^{校1}22】

「生知⁽¹⁾之聖、不待學而自至。若非生知、須要學問。學問之先、止是致知。所知果致、自然透徹、不患不進。」謙請云「知得、須要踐履。」曰「不真知得、如何踐履得。若是真知、自住不得。不可似他們只把來說過了。」又問「今之言學者滿天下、家誦中庸、大學語孟之書、人習中庸、大學、語孟之說。究觀其實、不惟應事接物與所學不相似。而其爲人舉足動步、全不類學者所爲。或做些小氣象、或專治一等議論、專一欺人。此豈其所學使然歟。抑踐履不至歟。抑所學之非歟。」曰「此何足以言學。某與人說學問、止是說得大概、要人自去下工。譬如寶藏一般、其中至寶之物、何所不有。某止能指與人說、此處有寶。若不下工夫自去討、終是不濟事。今人爲學、多是爲名、不肯切己。某甚不滿於長沙士友。胡季隨特地來一見、却只要相閃、不知何故。南軒許

久與諸公商量、到如今只如此、是不切己之過。」

〔校注〕

〔校1〕 本条は楠本本「訓門人」には収められていない。

〔訳〕

朱子「生まれながらにして知る聖人は、学ぶまでもなく自然に（理想の境地に）至つている。もし生まれながらに知るのでなければ、学問をしなければならない。学問の始めは、「致知」に他ならない。「知」ることが「致」れば、自然にすべてがすつきり理解でき、学問が進まないなどと氣にする」とはなくなる。」

廖謙「知つたからには実践しなければならないのですね。」

朱子「真に知つたのでなければ、どうして実践できよう。もし真に知れば、自ずからじつとしてはいられなくなる。彼らのように口先だけで言つて済ませていてはだめだ。」

廖謙「今、学問について語る者は天下に満ち、家」とに『中庸』『大学』『論語』『孟子』の書を誦し、人ごとに『中庸』『大学』『論語』『孟子』の説を習つています。しかしながら、その実際を觀察してみますと、物事への対処のしかたと学んでいるものとが似ても似つかないばかりか、人柄や立ち居振る舞いまでもが、まったく学ぶ者として似つかわしいものです。小賢しい雰囲気を氣取る者もいれば、専ら高遠な議論ばかりをしてひたすら人を欺く者もいます。こういった弊害はどうして学問そのもののせいでありましよう。むしろ実践が不十分であるせいでしょうか。それとも学んだものが悪かったのでしょうか。」

朱子「そういう輩は学問という言葉で語るまでもない。私が人に学問を語る時は、その大体を語るだけで、人が自分で努力実践することを求めている。それはちょうど宝物の蔵と同じようなもので、蔵の中にはあらゆる至宝が眠っているのだが、私はただ人にそこに宝があると指摘するだけだ。もし自分で努力して探しに行かなければ、結局は何にもなりはしない。今の人々の学問は、多くは名声のためであつて、己に切実な問題として学ぼうとはしない。私は長沙の士友たちに対して非常に不満を持っている。胡季隨（大時）はわざわざ来たのにちよつと顔を出しだけで私を避けようとしていたが、あれはいつたいどういうことだったのだろう。南軒（張栻）は長い間諸君と色々議論してきたようだが、今に到つてもこの有り様なのは、己に切実な問題として学ばない弊害であろう。」

〔注〕

(1) 生知　『中庸』(章句二十章)「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也。」

(2) 胡季隨

胡大時、字季隨。湖南学の胡宏の子。『資料索引』一五八三頁。『学案』卷七一。卷一二

三・3条「君擧到湘中一收、收盡南軒門人、胡季隨亦從之問學。某向見季隨、固知其不能自立、其胸中自空空無主人、所以纔聞他人之說、便動。季隨在湖南頗自尊大、諸人亦多宗之。凡有議論、季隨便爲判斷孰是孰非。此正猶張天師、不問長少賢否、只是世襲做大事。正淳曰、湖南之從南軒者甚衆且久、何故都無一箇得其學。曰、欽夫言自有弊。諸公只去學他說話、凡說道理、先大拍下。然欽夫後面却自有說、諸公却只學得那大拍頭。」

【二一六・23】

廖兄請曰「某遠來求教、獲聽先生雅言至論、退而涵泳、發省甚多。旅中只看得先生大學章句、或問一過、所以誨人者至矣、爲學入德之方、無以加此、敢不加心。明日欲別誨席、更乞一言之賜。」曰「他無說、只是自下工夫、便有益。此事元不用許多安排等待、所謂造次顛沛必於是也。人只怕有悠悠之患。」廖復對曰「學者之病、多在悠悠、極荷提策。」曰「見得分曉、便當下工夫。時難得而易失、不可只恁地過了。」「蓋卿。」

〔校注〕

- (校1) 和刻本は「學」を「孝」に作る。
- (校2) 楠本本は「曰」を「先生曰」に作る。
- (校3) 楠本本は「元」を「无」に作る。
- (校4) 楠本本は「廖」を「廖兄」に作る。

〔訳〕

廖兄（廖謙）がお願ひして言った。

廖謙「私は遠くからお教えを求めてここへやつて来て、先生の雅言至論を拝聴することができました。退

席してじっくりと味わつてみましたところ、啓発され反省するところが非常に多くありました。旅の途中には先生の『大学章句』『或問』を一読することしかできませんでしたが、ご教誨は尽くされており、学問道德に取り組む方法も他にこれに加えようがなく、深く心に刻まねばならないものと受け止めております。明日私は先生にお教えいただくこの場から去らなければなりませんが、そこでもう一言賜りたくお願ひ致します。」

朱子「他に特別にいうことはないよ。ただ自分自身が取り組んでこそ益があるのだ。こういうことはそもそもあれこれ計画や算段をする必要はないのであって、『論語』に「造次顛沛必ず是に於いてす（いかなる緊急の状況においても仁に基づいて行動する）」というのもこのことなのだ。ただ悠悠とのんびりしてしまうという欠点があるのだけが問題なのだ。」

廖謙「学ぶ者の欠点は多くはこの悠悠ということにある、このお言葉をしっかりと心に留めて戒めと致します。」

朱子「はつきり分かつたのならば、すぐに取り組みなさい。時は得難く失いやすいものだ。そんなふうにただ（口で言うだけで）過ごしてしまってはいけないのだよ。」

〔記録者 襲蓋卿〕

〔注〕

(1) 造次顛沛必於是 『論語』里仁「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」。

(2) 悠悠 のんびりと悠長に構えることで、朱熹は「悠悠」という表現で学ぶ者たちの怠慢を繰り返し戒めている。卷一一五・33条「悠悠於學者最有病」。

【一一六・24】

先生問(校1)「前此得書、甚要講學、今有可說否。」自修云(校2)「適值先生去國(校3)匆匆、不及欵承教誨。」曰(校4)「自家莫匆匆便了。」「訓(校5)自修。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「問」の後に「自修云」が入る。

(校2) 楠本本は「曰」を「先生云」に作る。

(校3) 楠本本は「自修」の後に「自錄」が入る。

〔訳〕

朱子「以前の君からの書簡には、ぜひ共に学問議論をしたいとあつたが、いま何か言うべき」とはあるかね。」

(孫) 自修「先生が都を去られるという慌ただしい状況ですので、ご教誨を頂戴するには及びません。」

朱子「(状況が慌ただしいからといって) 君自身が慌ただしくしていなければ、それでいいのだ。」

〔孫自修への訓戒。〕

〔注〕

(1) 自修 孫自修、字敬夫、安徽宣城人。『門人』一七三頁。『資料索引』一九一九頁。『學案』卷六九。
(2) 去國 田中謙一「朱門弟子師事年攷」(二五六頁)では孫自修の師事が朱子の首都杭州滯在期間で
あつたことを考察している。卷一〇七・3条に孫自修の初見時の記録がある。

〔一六・^校25〕

〔^校2〕平日工夫。泳對「理會時文。」先生曰「時文中亦自有工夫。」請讀何書。曰「看大學。」「以下訓泳。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一二七(一六一三頁)に収める。

(校2) 楠本本は「問」の上に「八日見文之。「甲戌生。」午後過東書院侍坐。」が入る。

〔訳〕

先生がふだんの修養について質問された。

(湯) 泳「科舉用の文章に取り組んでいます。」

朱子「科舉用の文章にも、おのずと自己の修養になるところがある。」

何を読書すればよいかをお尋ねした。

朱子「『大學』を読みなさい。」

〔本条以下、湯泳への訓戒。〕

〔注〕

(1) 湯泳、字叔永、鎮江府丹陽人。『門人』二三九頁。『資料索引』一七七二頁。『學案補遺』卷六九。以下、28條まで湯泳に対する訓戒。

【一六・26】

〔校1〕說大學首章不當意。先生說「公讀書、如騎馬不會鞭策得馬行、〔校3・校4〕撐船不會使得船動。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は、本条を巻一一七(一六一三頁)に収める。

(校2) 楠本本は「說」の前に「九日掣行李、過崇報精舍、晚過樓下」が入る。

(校3) 楠本本・和刻本・正中書局本・朝鮮整版は「櫓」を「撐」に作る。

(校4) 楠本本・正中書局本は「船」を「舡」に作る。

〔訳〕

『大學』第一章がしつくり理解できないと先生に申し上げた。

朱子「君の読書は、騎馬で言えば鞭を打つても馬を走らせることができないようなものだし、船を漕いででも船を動かすことができないようなものだ。」

【一六・^(校1)27】

「讀大學、必次論孟及中庸、兼看近思錄。」先生曰「書讀到無可看處、恰好看。⁽¹⁾」

〔校注〕

〔校1〕楠本本は、本条を巻一一七（一六一四頁）に収める。

〔校2〕和刻本・正中書局本・朝鮮整版は「大學」の後に「畢」が入る。

〔訳〕

（湯泳）『大學』を読みましたら、次は『論語』『孟子』そして『中庸』と読み進め、併せて『近思錄』を読もうと思います。」

朱子「書物は、もうこれ以上どこも読むところがないところまで至つてこそ、まさしく読んだということだ。」

〔注〕

（1）恰好看 「恰好」は「ちょうどよい」「ぴったりの」「折良く」の意味で多用される語。巻一〇七
・37条「先生愛說恰好二字。云、凡事而有恰好處。」ただし、この「恰好看」は、むしろ「それこそ
がまさしく読むということだ」、或いは「それくらいがちょうどよい読み方だ」の意味か。同様の用い

方として、次のものを参照。卷三四・163条「如入孝出弟謹信汎愛親仁、非謂以前不可讀書。以前亦教他讀書、理會許多道理。但必盡得這箇、恰好讀書。又曰、到這裏、却好讀書」。ここに「恰好讀書」は「（入孝出弟以下のことを十分理解しつくしてこそ）讀書をする絶好のタイミングだ」、或いは下文の「却好讀書」と同様、「かえつて讀書しやすくなる」の意味か。

【一一六・28】

先生與泳說「看文字罷、常且靜坐。^{〔校2〕}」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は、本条を卷一一七（一六一四頁）に収める。

〔校2〕 楠本本は末尾に「以上泳自錄」の割注が入る。

〔訳〕

先生が泳にわざわざおつしやつた。

朱子「書物を読んだら静座に取り組んでみなさい。」

（23～28条担当 宮下 和大）

※ 本稿と前号（一）とは、平成十七～二十一年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」による「中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通—新儒教と医学思想の文献を中心として」（課題番号一七〇八三〇三四）の研究成果の一部である。